

一般社団法人日本生態学会

No.63

2024年5月

ニュースレター

日本生態学会各賞候補者募集	1
第71回日本生態学会横浜大会（ESJ71）開催報告	5
記事	
I. 一般社団法人日本生態学会 2024 年度定時総会、代議員会、各種委員会において報告・承認・決議された事項	10
A. 報告事項	10
B. 審議事項	18
II. 第71回日本生態学会大会記録	22
III. 代表理事（兼会長）と業務執行理事の選任について	26
IV. 寄附一覧	26
V. 書評依頼図書	26
書評	26
日本生態学会役員・代議員・委員一覧	28
京都大学生態学研究センターニュース	31

日本生態学会各賞候補者募集

第23回「日本生態学会賞」

顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たした本法人会員に対して授与される日本生態学会の最も権威ある賞です。受賞者は会員から推薦された候補者の中から選考され、大会時において表彰されます。

第29回「日本生態学会宮地賞」

生態学の優れた業績を挙げた本法人の若手会員を対象とした賞です。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として3名の受賞者を選考し、各々10万円の賞金が贈呈されます。

第18回「日本生態学会大島賞」

野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本法人の会員を対象とした賞です。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として2名の受賞者を選考し、各々10万円の賞金が贈呈されます。

第13回「日本生態学会奨励賞（鈴木賞）」

学位取得後4年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者に授与される賞です。自薦による応募者の中から原則として3名の受賞者を選考し、各々5万円の賞金が贈呈されます。

第2回「日本生態学会自然史研究振興賞」

生物の記載、分布、生活史など、地域の生物多様性情報の収集と公開を通して、生態学の基盤強化に寄与している本法人の会員を対象とした賞です。自薦による応募者もしくは本法人会員により推薦された者の中から原則として2名の受賞者を選考し、各々10万円の賞金が贈呈されます。

記

1. 受賞候補者の条件：本学会員
2. 書式：生態学会ウェブサイト (<https://esj.ne.jp/esj/>) よりダウンロード
3. 送付先：
(電子メール) office@esj.ne.jp
(郵送) 〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8
日本生態学会事務局気付
日本生態学会〇〇賞選考委員会委員長
(〇〇は応募する賞名を入れて下さい)
4. 締め切り日：2024年8月16日（金）必着

日本生態学会賞規則

- 第1条 日本生態学会賞は、本法人会員で、顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たし、本法人会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、受賞は毎年原則として1名とする。
- 第2条 日本生態学会賞候補者を選考するため、日本生態学会賞候補者選考委員会（以下「委員会」）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は代議員の推薦により9名を選出するが、生態学の各分野に偏りの無いように配慮する。委員長は委員の互選により毎年定める。委員の任期は3年とし、毎年3名を改選する。ただし任期満了後2年間は再任されない。
- 第4条 推薦者は、推薦理由を添えて候補者を推薦するとともに、委員会の求めに応じて必要な資料を提出しなければならない。
- 第5条 委員会は推薦理由をもとに受賞候補者を絞り、推薦者が提出する資料にもとづいて若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、原著論文業績の他に啓蒙的役割を果たした著書類及びそれらの国内外の波及効果に留意する。
- 第6条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第7条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第8条 受賞者の決定は、受賞式が行われる3ヶ月前までに行う。
- 第9条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状及び記念品を贈呈する。
- 第10条 受賞者は、原則として、その授賞式が行われる大会において記念講演し、その内容を本法人の学会誌に総説として投稿する。
- 第11条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会宮地賞規則

- 第1条 日本生態学会宮地賞（以下「宮地賞」という）は、生態学の優れた業績を挙げた本法人の若手会員で、自薦による応募者もしくは本法人会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として3名とする。
- 第2条 宮地賞受賞候補者を選考するため、宮地賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、本法人会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無、及び会員歴（日本生態学会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無及び会員歴を含む）にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。

また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。

第7条 受賞者の決定は授賞式が行われる3か月前までに行う。

第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金10万円を贈呈する。

第9条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本法人の学会誌に投稿する。

第10条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会大島賞規則

第1条 日本生態学会大島賞（以下「大島賞」という）は、野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本法人の会員を対象とし、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として2名とする。

第2条 大島賞受賞候補者を選考するため、大島賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。

第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。

第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては研究の継続期間や本法人の会員歴（日本生態学会の会員歴を含む）にも留意する。

第5条 選考委員が被推薦者となり選考の最終段階まで候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。

第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。

第7条 受賞者の決定は授賞式が行われる3か月前までに行う。

第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金10万円を贈呈する。

第9条 受賞者は受賞の対象となった研究課題について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説・解説等を本法人の学会誌に投稿する。

第10条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会奨励賞（鈴木賞）規則

第1条 日本生態学会奨励賞（以下「奨励賞」という）は、本法人の会員であり、学位取得後4年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者で、自薦による応募者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として3名とする。

第2条 奨励賞受賞候補者を選考するため、奨励賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。

第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。

第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候

- 補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、会員歴にも留意する。
- 第 5 条 選考委員が被推薦者あるいは推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第 6 条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第 7 条 受賞者の決定は授賞式が行われる3か月前までに行う。
- 第 8 条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金5万円を贈呈する。
- 第 9 条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本法人の学会誌に投稿する。
- 第 10 条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会自然史研究振興賞規則

- 第 1 条 日本生態学会自然史研究振興賞は、生物の記載、分布、生活史など、地域の生物多様性情報の収集と公開を通して、生態学の基盤強化に寄与している本法人の会員を対象とし、自薦による応募者もしくは本法人会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として2件とする。
- 第 2 条 自然史研究振興賞受賞候補者を選考するため、自然史研究振興賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。
- 第 3 条 委員会の委員は代議員の推薦により4名を選出する。委員長は委員の互選により毎年定める。委員の任期は2年以内とし、毎年2名を改選する。ただし任期満了後2年間は再任されない。
- 第 4 条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。
- 第 5 条 選考委員が被推薦者となり選考の最終段階まで候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第 6 条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第 7 条 受賞者の決定は授賞式が行われる3ヶ月前までに行う。
- 第 8 条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金10万円を贈呈する。
- 第 9 条 受賞者は受賞の対象となった研究課題について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演する。
- 第 10 条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

第71回日本生態学会 横浜大会 (ESJ71) 開催報告

大澤 剛士 (大会企画委員会 前委員長)

第71回日本生態学会大会 (ESJ71) は、2024年3月16日から21日までの6日間、前半2日は完全オンライン、中日以降は関内ホール、横浜国立大学を会場に、変則的なハイブリッド形式で開催されました。大会にはオンライン、オンサイト含めて合計2,452名の参加がありました。内訳として、20件のシンポジウム、21件の自由集会、9件のフォーラムと936件の一般講演(口頭・ポスター: キャンセル含む)、高校生ポスターでは63件の申し込み、発表がありました。2019年の神戸大会以来となるオンサイト発表を実施することができ、同時に発表、視聴ともにオンライン利用も可能という、生態学会大会としては過去に例のない魅力的な大会になったかと思えます。生態学会として初のハイブリッド大会として手探りの中、大会の準備に尽力くださった企画委員会の皆さま、久しぶりの開催で様々なノウハウが失われつつあった中、各種対応に尽力してくださった実行委員会の皆さまには多大なご貢献をいただきました。変則的な形式となったにも関わらず、オンライン、オンサイト含めてご参加いただきました参加者の皆さまにも感謝申し上げます。

変則的な大会形式

ESJ71 横浜大会は、最初の2日間は完全オンライン、中日以降はオンサイトありのハイブリッド形式という変則的な形式を採用しました。皆さんもご存じのとおり、生態学会大会はESJ67名古屋大会以降、ESJ70仙台大会までの間、新型コロナウイルス感染症の影響で、生態学会大会は完全オンライン開催となっていました。時間に縛られない点や移動が不要な点等、オンラインにも様々な良さがある点については、皆さんも日々の生活の中で実感されていると思います。一方、新たな人や研究との出会いや、宴席等、直接的な交流を通して深い議論を行う等、オフライン、対面でこそ得られる良さがあることも事実です。これらメリットデメリットを勘案し、多くの方が満足できる大会形式はどんな形であるかについて、ESJ71の関係者は企画委員長である私、実行委員長である鏡味麻衣子さん(横浜国立大学)を中心に、ESJ70仙台大会以前から議論を重ねてきました。2023年に入った頃には、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが5類感染症に変更になること、これを受けて各種行動制限が緩和されることが見えてきており(最終的に、新型コロナウイルス感染症は2023年5月8日に5類感染症になりました)、議論は、何らかの形でオンサイトを実現すること、ただしオンライン形式は残したい、すなわちハイブリッド形式をどのように実現するかに収束していきました。ただし、ご存じの方も多と思いますが、生態学会大会は参加者数が年々増加傾向

にあり(これ自体は喜ばしいことではありますが)、会場の確保や会期の長期化、これに伴う運営負担の増加といった課題が顕在化しています。横浜周辺は大型の会議場等、学会開催に利用できる施設の利用料が非常に高額であり、コロナ禍以前、最後のオンサイト大会となった神戸大会と同規模の施設を確保することは、予算面でかなり難しいという課題もありました。そんな中で出てきたアイデアが、今回の開催形式です。

会期の一部を完全オンラインにしてしまうことで、会場を長期間確保することに伴う予算増大という問題が解決されます。前半をオンライン期間、後半をオンサイト期間という形で分けてしまい、中日を設けて総会、受賞講演会を午後からとすることで、遠方からオンサイト参加のために移動される方の移動時間も確保できます。どの発表カテゴリをオンサイト発表可能にするかを決定するのが最も難しかったのですが、大会における最も重要な発表カテゴリはシンポジウムであると考え、シンポジウムはすべてオンサイト発表を前提とし、それに向けた規模の会場を確保することに決定しました。一方で、オンサイトのポスター発表についても、議論を深める場として重要であり、特に学生ら若手らの交流の場として大切な機会となっていることは関係者全員が認識しており、ポスター発表をどのように扱うかについても大きな課題でした。ポスターのオンサイト発表をどのように実現するかについて議論を重ね、最終的には全員が前半期間にオンライン発表を行い、希望者については後半期間にオンサイト発表を行う形式としました。ただし、ポスターのオンサイト発表件数には上限を設けることにしました。上限を設けた理由は、会場スペースの問題です。なお、新型コロナウイルスの感染拡大が発生し、大会直前にハイブリッドから完全オンライン開催に変更となったESJ69福岡大会においても、企画委員長であった高橋佑磨さん(千葉大学)が同様の形式について検討を進めていました。今回の形式は、生態学会大会くらいの規模(参加者2,000-2,500人程度)でハイブリッドを実現する際の、一つの現実解なのかもしれません。

実は生態学会大会の開催会場を決める上で、ポスター会場の確保というのは常にネックとなっています。というのは、ときに1,000件近い申し込みがあるポスター発表は、発表日を2日に分けたとしても、500件のA0ボードを同時に掲示できるスペースが必要になるからです。また、ポスター発表会場は、できれば体育館のような広い空間にまとめられることが望ましいです。しかし、このような空間を所有する施設というのは非常に限られており、仮に所有していたとしても、その利用料は高額であることが多いです。ESJ71では、オンサイト会場となった横浜国立大学における利用可能な建物を複数見し、おおむね300件までならオンサイト発表が可能と判

断しました。シンポジウム会場についても、過去の大会における申し込み件数を確認の上、過去最大数の申し込みがあったとしても納められる数の会場を確保することにしました。大学の施設は利用料が比較的安価なのですが、その分会場が複数個所に分散してしまうという課題があり、会場は広さだけでなく、その配置についても考慮の上で繰り返し検討を行い、決定しました。

新しい試み：テーマ公募型シンポジウム

生態学会では、各種委員会とは別で、特定の事項について集中的に議論するタスクフォースというものがあり、上げられることがあります。この中で、全国大会の今後について議論する大会将来像タスクフォースというものがありました（既に解散）。テーマ公募型シンポジウムの実施は、ここからの要望で決定しました。テーマ公募型シンポジウムとは、シンポジウムのコンピナーの方が特定のテーマを提案し、テーマに沿ったシンポジウムを開催するとともに、一般講演者もそのテーマ下で発表を行い、演者間での交流も促進するというものです。日本生態学会大会では、学会側が事前に発表分野というものを設定し、一般講演者はその中から自身の発表に最も近いものを選び、同じ、あるいは近い分野の発表をプログラム上でまとめるという方式でプログラムの編成を行っています。一方で、海外の学会では、そもそも学会運営側で特定の分野（テーマ）というものを設けることをせず、シンポ等の主催者が発表テーマを提案し、そのテーマに発表者が参加するという形式でプログラムが編成されることも多いようです。筆者はさほど海外の学会への参加経験がないのですが、過去に国際生態学会連合（INTECOL）でそのような形式がなされており、あるテーマに参加して発表をしたことがあります。特定分野のリーダー的な存在や、売り出し中の若手らが提案したテーマに対して一般参加者が応募する形式が実現すれば、テーマに参加する演者間で議論を深め、テーマ自体を盛り上げるきっかけになりますし、参加者も興味があるテーマの内容を、シンポジウムに限らず聞けるというメリットがあります。さらに、全ての発表をこの形式にできれば、大会におけるプログラム編成の手間も軽減される可能性もあります。このようにテーマ公募型シンポジウムは魅力的な仕組みではあるのですが、参加者が2,000人を超える規模の生態学会大会において、急に発表形式をドラスティックに変えることは、運営側、発表側に大きな負担を強いる可能性があります。この点も勘案し、企画委員会において主に各部長、副部長の方々と議論を重ねた結果、今回は試行として公募テーマは2件を上限とし、発表申し込み時に選べる分野にそのテーマを追加し、もともと存在していた分野は維持するという形式としました。また、予想できない分野のポスターは賞審査の選定が困難になることが予想されたことから、公募テーマに参加したポスターは賞に応募できないことになりました。ちょっと半端な実施方法となったのですが、新しい分野の発表をまとめて聞ける機会となった、これまでの発表分野ではうまく収まらない内容の発表がしや

すかった等、肯定的な意見も複数あり、実施した意義はあったと考えています。ただし、公募やプログラム編成にかかる事務コストが増えてしまったのは事実なので、今後、同形式を継続するか、拡大するか等については検討の余地がありそうです。

再開した形式：ER シンポ

ER シンポは、海外から講演者を学会負担で招聘し、英語でのシンポジウムを開催すると同時に、その内容について学会が発行する英文誌 *Ecological Research* 誌において特集を組んでもらうというもので、大会および英文誌の活性化に大きく貢献してきた企画です。ただ、コロナ禍で海外出張が難しくなったこともあり、大会がオンラインで開催されている期間は休止状態にありました。オンラインでシンポジウムを行う今大会においては、ぜひ再開したいという意見がシンポジウム部会を中心に上がり、ESJ71では久しぶりに2件のERシンポを開催することができました。本シンポは国際的に著名な方の講演を直接聞く機会、さらには、その後の懇親会等で直接議論する機会にもなり、参加者にとって非常に有意義であったと思います。ただ、近年の円安、物価上昇の影響から、招待講演者の旅費および滞在費の調整について、招聘責任者の方々に負担をお掛けしてしまったことは反省点です。こちらは学会の旅費規程等にも関わる問題で簡単には解決しにくいですが、学会の魅力を高めるためにも、改善を進めていくべき項目と考えます。

オンライン実施における準備と改善

オンライン大会が数年続いたこともあり、大会の準備運営におけるノウハウは一定の蓄積がありました。このため、オンライン部分の準備においては特に大きな困難はなかったと感じています。この点については、過去の企画委員会関係者に改めて感謝したいと思います。

細かい点ではありますが、本大会の実施面で改善した点をいくつか挙げると、口頭発表について事前のビデオ提出を原則としたこと、集会、シンポの見逃し配信について原則として編集せずに視聴可能にすることで、視聴可能になるまでのタイムラグを減らす工夫をしたことがあります。前者については、ビデオ提出を前提にすることで、見逃し配信が視聴可能になるまでのタイムラグをゼロにできることが最大の理由です。これに加えて、管理運営上のコスト低減という目的もありました。というのは、リアルタイムのオンライン口頭発表では厳密なタイムキープが難しく、過去のオンライン大会においては、時間を超過してしまう方が一定数いたこと、当日キャンセルになった方の枠を前の演者の方が質疑応答等で勝手に使ってしまう等が発生したこと等がありました。これはオンライン、オンサイト関係しない注意事項ですが、研究発表および質疑応答の時間は限られていますので、演者の方も、質問される方も、時間厳守にはご協力いただけますよう改めてお願いする次第です。

組織においては、企画委員会内に新しくオンライン部

会を立ち上げました。これは、ESJ70 仙台大会の企画委員長であった細将貴さん（早稲田大学）から、オンライン大会においては誰が担当するか曖昧になってしまう業務が多々存在するので、オンライン関係の担当者を明確に設定したほうがよいという引き継ぎを受けたことによります。部会長は深谷肇一さん（国立環境研究所）に引き受けていただきました。新しい部会ということで立ち上がりが遅れたこと、ハイブリッド大会においてはオンサイト、オンライン両方の情報を各部会が正しく把握することが重要と考えたことから、部会員については既存の企画委員会各部会から各2名を併任で参加していただくことにしました。ESJ71においては交流ツール SpatialChat の全体運営、申し込みシステム、大会プラットフォームの修正点洗い出し、動作確認のとりまとめ等を担っていただきました。新しい部会ということで、企画委員長である私自身が適切な作業依頼、割り振り等ができなかった面があることは反省点ですが、ハイブリッドでの大会運営がなされる場合は、今後ますます重要な役割を担っていくことになると思われます。

準備の面では、これまで学会発行のニュースレターという形で大会 X 報として準備状況を pdf で配信していたのですが、これを取りやめたことも改善点として挙げられます。大会準備報告を定期的に発行することは、運営側にとって準備の進捗管理が明確であること、参加者にまとまった情報を提供できるというメリットがある反面、既に古くなってしまった情報が常時閲覧可能になってしまうという課題がありました。例えば大会 2 報が既に発行されているにも関わらず、大会 1 報の記述された内容に関する質問が多数寄せられる、大会報の発行日程が決まっているため、発行直後に決定された事項については参加者への情報提供が遅れるといった状況がしばしば発生していました。そこで ESJ71 では、大会の web サイトを例年より早く立ち上げ、これまで大会報で提供してきた情報は web ページ上で逐次更新していくという形式にしました。web サイトは逐次更新となるため、新しい情報や全体像がつかみにくくなったという声はありましたが、当然ながら過去の大会報に関する問い合わせはなくなり、大会準備の運営上は労力の削減につながりました。いくつか反省点はありますが、課題は比較的明確ですので、運営委員会を中心に、次回大会の準備においてはさらに改善していけると思います。

ハイブリッド形式の実施における準備運営

一方、ハイブリッド、つまりオンサイト発表と同時にオンラインで配信する形式については、授業やセミナー等、演者が固定あるいは数名程度の形式については経験してきたものの、学会大会のように演者が常時入れ替わり、かつ議論の場にもなる状況をどのように対応するかについては全くの未知数でした。この部分については、実行委員長である鏡味さん、副委員長である佐々木雄大さん（横浜国立大学）が中心となり、複数の業者に相談して実現方法を検討してくれました。この結果、演者はオンラインミーティングツール（例年通り、zoom を利

用しました）に参加する必要がない方式が採用されました。これは、通常のオンサイトシンポ等でしばしば実施されるように、投影用のコネクタに演者が PC を接続するだけで、そのスライド画像がオンライン配信されるという仕組みです。配信されるのは PC の画面だけでなく、演者、会場を撮影するカメラ画像、会場マイク音声も同時に配信される仕組みで、演者は特にオンラインを意識せずに講演することができました。後述するとおり、当日は色々トラブルが発生してしまったのですが、ハイブリッド発表の実現方法としては非常に優れた仕組みであったと考えています。

トラブルが多発した当日運営

オンライン、横浜国立大学でのハイブリッドいずれにおいても、特に初期に多くのトラブルが発生し、演者、参加者の皆さんにご迷惑をお掛けしてしまいました。ここに改めてお詫び申し上げます。生態学会大会くらいの規模となると、予期せぬトラブルが発生することは避けられませんが、今回発生したトラブルの中には、事前に予測できた部分もあったと反省しています。まずはオンラインのみで開始した ESJ71 ですが、オープンした直後に想定以上の負荷が掛かってしまったらしく、特にオンライン上でポスターが表示できなくなるトラブルが発生しました。他、口頭発表においてもタイムキーパーの配置や表示等がうまくいかず、いくつかの口頭発表レーンで遅延が発生してしまいました。企画副委員長の高橋一男さん（神奈川大学）、サポートに入ってくれていた発表編成部会員、英語口頭発表部会員の方々らの機転で大事には至りませんでした。ご自身の発表時間において通常の発表ができないということは学会大会としてあってはならないことです。完全オンサイトの大会では企画委員会は準備まででほぼ終わりなのですが、オンラインを含む大会においては、大会開始後にも様々な面に対応をする必要が発生します。今回はハイブリッド大会ということで、オンライン部分のトラブル対応やサポートは企画委員会でもかなりの部分を担うことにしたのですが、こちらの事前準備が不十分であったことは、全て企画委員長である私の責任です。反省事項はしっかり次回以降に引き継いでいきます。

中日である総会、受賞講演会におけるハイブリッド運営は非常にスムーズに実施できたと考えています。これは、規模は大きくても会場が一つであったこと、配信等を担当する業者（大会会場とは別業者）が会場であった関内ホールにおいて類似業務の経験が豊富であったことが大きな要因でした。その一方で、横浜国立大学に会場を移した後半では、オンサイト、オンラインともにトラブルが発生し、やはり演者、参加者の皆さんにご迷惑をお掛けしてしまいました。マイクを始めとする機材トラブルは担当した業者に文句の一つも言いたいところですが、ネットワーク関係のトラブルは完全に想定外でした。ハイブリッド形式で学会を実施する場合は、発表がオンサイトのみである場合に比べてネットワークの利用負荷が圧倒的に大きくなるという根本的な課題も存在しま

す。オンライン閲覧室での利用を想定し、ポケットwifiも複数台用意していたのですが、発表の配信自体がうまくいかない状況は想定できませんでした。全てのネットワークトラブルについて詳細な検証を行うことは難しかったのですが、普段の講義等では起こらないような高負荷が発生してしまったことに伴う速度遅延に加え、ネットワーク設定上の問題で、一つのIPアドレスを複数機器で奪い合うような現状も発生していた様子です。このあたりについては、大会会長であった小池文人さん（横浜国立大学）が当日の対処から、大会後のまとめ資料の作成まで実施してくれましたので、今後の引き継ぎ資料として活用できればと思います。大学会場を利用する際には、授業期間中には現地確認や実地検証を行う機会が限られてしまうこと、大会の時期が入試に近くなってしまい、直前のネットワーク負荷試験等が困難であるという構造的な問題があります。ハイブリッド形式の学会が増えている現在、会場の選定にはキャパシティだけでなく、ネットワーク環境も考慮しなければいけないことが浮き彫りになりました。

今後の学会大会運営に向けた課題と展望

ESJ71では、学会関係者の悲願であったオンサイト発表の再開を含む、ハイブリッド大会が実現できた点は非常によかったと思います。ただ、長年の課題である準備の大変さを軽減することができなかった点、さらには本番でのトラブルが多く、当日運営に際して実行委員会はもちろんのこと、企画委員会メンバーにも多大なる負担を強いてしまった点は大きな反省点です。とはいえ、負担を軽減するためには、もはや参加者へのサービスを低下させるか、参加費を上げる等によって運営予算を増やし、外注比率を高めるしかないというのが正直な感想です。細かい改善点はいくらかもありますが、抜本的な改革を行わないことには、運営負担は増加する一方です。ESJ71で実施したハイブリッド形式は一つの実現解かもしれないと先述しましたが、実際に運営に携わった立場からは、オンライン形式とハイブリッド形式の2つの学会を連続して運営したようなもので、その負担は相当なものでした（過去と正確に比較できるわけではありませんが）。当日運営については、実行委員会は全員、企画委員会では部会長、副部会長の方々については、ほとんど講演を聞いたり議論したりという時間が取れなかったと思います。大会運営に関わる委員のメンバーは若手から中堅が多く、学会を盛り上げ、生態学の発展に貢献していく方々です。ボランティアベースで一定規模の学会大会を運営するということは、そういった方々から発表や議論の機会を少なからず奪ってしまう面があることは、目をそらしてはならない事実です。ESJ71で実現したハイブリッド形式は、今度の生態学会大会を考えていくための一つの基準とし、今後は運営側の負担軽減はもちろん、参加者の満足度も一定以上が担保できる、皆が幸せになれる大会の実現に向けた抜本的な動きに繋がることを期待したいと思います。もちろん私自身も本大会に関わった身として、引き続きできる範囲での尽力をし

ていく所存です。

謝辞

最後になりましたが、大会の準備と運営にあたり、ご協力いただいた方々に厚く御礼申し上げます。全員の名を挙げることはできませんが、特にご尽力いただいた方々の名を挙げさせていただきます。

小池文人さん（大会会長）、鏡味麻衣子さん（大会実行委員長）、佐々木雄大さん（大会実行副委員長）をはじめとする実行委員会のみなさま、実行委員会の高橋一男さん（大会企画副委員長）、小林卓也さん（運営部会長）、橋本洸哉さん（同副部会長）、徳田誠さん（シンポジウム部会長）、佐藤永さん（同副部会長）、大館智志さん（同副部会長）、平野尚浩さん（ポスター部会長）、西嶋翔太さん（同副部会長）、勝原光希さん（高校生ポスター部会長）、山崎曜さん（同副部会長）、松崎慎一郎さん（発表編成部会長）、富松元さん（同副部会長）、上村真由子さん（英語口頭発表部会長）、小林真さん（同副部会長）、深谷肇一さん（オンライン部会長）、小出大さん（同副部会長）をはじめとする大会企画委員のみなさま、ESJ71タスクフォース、学会執行部、事務局のみなさまに心から感謝いたします。

各種審査員を務めてくださったみなさまにも感謝申し上げます（順不同、敬称略）。複数カテゴリにおいて審査をしてくださった方もいらっしゃいます。皆さまの尽力に改めて御礼申し上げます。

ポスター賞：

土岐和多瑠、中濱直之、宮園 誠二、山浦悠一、土井寛大、川津一隆、大崎晴菜、青木大輔、江川知花、大脇淳、綱本良啓、柿岡諒、中野光議、小柳知代、鈴木紅葉、楠本良延、吉田丈人、高田宜武、太田俊二、山田寛之、近藤美由紀、下野嘉子、木村恵、佐橋玄記、谷内茂雄、才木真太郎、諸澤崇裕、若宮 健、福家悠介、山ノ内崇志、小林剛、赤石大輔、藤本真悟、水村春香、秦 彩夏、中谷美晴、三島慎一郎、澤田紘太、古川拓哉、吉田智弘、河原崎里子、原野智広、栗山武夫、森井清仁、野口（舟山）幸子、上田実希、神宮翔真、入谷亮介、榎木勉、幸田良介、本間淳、佐野智人、高橋大輔、小野田雄介、鈴木真裕、吉田勝彦、橋本佳延、小林慶子、内海俊介、福田将矢、船本大智、石崎智美、小山里奈、赤路康朗、下地博之、大崎遥花、綿野泰行、滝久智、高田守、山科千里、向草世香、原口岳、久野真純、倉本宣、岡本聖矢、上野尚久、駒田 夏生、黒川紘子、森英樹、深澤圭太、中島颯大

高校生ポスター賞：

渥美圭佑、板垣智之、井戸川直人、丑丸敦史、大崎晴菜、香川幸太郎、笠田実、北出理、久野真純、黒澤陽子、小林慧人、小峰浩隆、佐賀達矢、酒井聡樹、坂田ゆず、桜井良、Jamie Kass、篠原直登、嶋田正和、武田和也、辻冴月、仲澤剛史、中林雅、西脇亜也、樋口裕美子、福家悠介、

保坂哲朗、松本哲也、宮田理恵、望月昂、森嶋香織

英語口頭発表賞：

Samuel Ross、Mackenzie L. Kwak、中川光、徳田誠、保坂哲朗、今田弓女、吉川徹朗、安藤温子、藤井佐織、槻木玲美、佐藤悠、久野真純、亀田佳代子、松葉史紗子、小黒芳生、宇野裕美、三木健、京極大助、佐藤永、辻井悠希、竹内やよい、野田響、宮沢良行、辻井悠希、渥美圭佑、大崎晴菜、佐藤駿

4月にアンケート調査を実施しましたが、日本生態学会は大会タスクフォース、執行部、理事会を中心に、参加者にとっての満足度向上、運営負担の軽減の両立を目指し、議論と検討を進めています。私自身も学会として初のハイブリッド大会の企画に携わった立場として、よりよい大会の形の実現に向けて今後も協力していきたいと考えています。会員のみならず、ぜひ様々な形でご協力いただけますようお願いいたします。

記事

I. 一般社団法人日本生態学会 2024 年度定時総会（第 71 回大会会員総会、2024 年 3 月 18 日、代議員 22 名・会員 162 名参加）および代議員会、各種委員会において報告・承認・決議された事項

A. 報告事項

1. 事務局報告

a. 2023 年度会員数・学会誌発行状況

日本生態学会誌 73 巻

	1 号	2 号
発行部数	320	320
配本部数	297	287
残部数	23	33

保全生態学研究 28 巻

	1 号	2 号
発行部数	830	830
配本部数	802	806
残部数	28	24

Ecological Research Vol.38

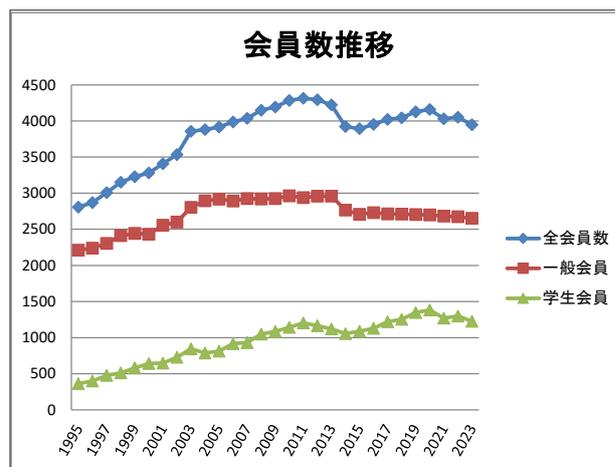
	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6
発行部数	105	105	105	105	105	105
配本部数	101	99	99	99	97	99
残部数	4	6	6	6	8	6

会員数

	2022 年 12 月末現在			2023 年 12 月末現在		
	一般	学生	合計	一般	学生	合計
北海道	254	137	391	252	127	379
東北	170	103	273	171	95	266
関東	985	431	1416	986	409	1395
中部	353	165	518	350	142	492
近畿	454	307	761	460	299	759
中四国	188	61	249	184	63	247
九州	230	91	321	217	83	300
外国	42	6	48	32	6	38
小計	2676	1301	3977	2652	1224	3876
賛助			67			65
名誉			7			7
小計			74			72
合計			4051			3948

会費納入率（各年 12 月末現在）

	2022 年		2023 年	
	一般	学生	一般	学生
北海道	92.5	76.6	94.4	72.4
東北	92.9	71.8	95.3	84.2
関東	93.6	71.9	94.6	77.0
中部	90.1	72.1	94.0	73.2
近畿	94.5	76.9	95.2	76.6
中四国	95.7	73.8	94.6	79.4
九州	95.7	79.1	95.4	75.9
海外	59.5	16.7	84.4	50.0
全体	92.9	73.9	94.6	76.5



b. 庶務報告（2023 年 4 月～2024 年 3 月）

- 日本学術振興会より令和 5 年度科研費（国際情報発信強化 B・OA 刊行支援）の不採択通知があった（4 月 1 日）
 - 令和 5 年度科学技術分野の文部科学大臣表彰若手科学者賞を生態学会推薦の山道真人氏が受賞したと報道発表された（4 月 7 日）
 - 新賞「自然史研究振興賞」選考委員の推薦を代議員に依頼し 4 名の選考委員を決定した（4 月 28 日）
 - 法務局に 2023 年定時総会にて就任した理事・監事交代を申請し登記された（5 月 8 日）
 - 日本学術振興会へ令和 4 年度科研費（国際情報発信強化 A）実績報告書を送付した（5 月 8 日）
 - 会員宛に 10 月の全国選挙実施に向けて住所変更手続き依頼の一斉メール配信を行った（6 月 28 日）
 - 第 22 回生態学琵琶湖賞授賞式・受賞記念講演を滋賀県庁で行った（7 月 8 日）
 - 学術振興会に令和 6 年度科研費（国際情報発信強化 OA 刊行支援）計画調書など応募書類一式を送付した。（9 月 15 日）
 - 次々期会長候補および次期代議員選挙の開票を京都大学にて行った（11 月 2 日）
 - 学会賞選考委員会に推薦された生態学会賞・宮地賞・奨励賞（鈴木賞）候補者が理事会メール審議にて承認された（11 月 27 日）
 - 自然史研究振興賞選考委員会に推薦された候補者が理事会メール審議にて承認された（12 月 1 日）
- *他、各種集会への後援・共催名義使用承認 3 件、賞・助成への学会推薦 3 件

c. 会計報告（2023 年 3 月～2024 年 2 月）

- 学術著作権協会より 2022 年度授業目的公衆送信保証金として 368,626 円の入金があった（3 月 27 日）
- 札幌コンベンションセンターに 2025 年 3 月開催 ESJ72 施設使用料として 628,220 円を支払った（3 月 29 日）
- 東北共立へ ESJ70 の Zoom および会場ライブ配信オペレーション委託費として 2,485,450 円を支払った（4 月 5 日）

4. AGRI SMIL へ ESJ70 プラットフォーム利用料として 2,821,564 円を支払った (4 月 27 日)
5. 国際文献社へ ESJ70 大会関連委託費として 3,720,535 円を支払った (5 月 9 日)
6. Wiley 社へ 2022 年英文 3 誌発行費として 219,696 円を支払った (6 月 12 日)
7. 2023 年地区会活動費を各地区会に送金した (6 月 16 日)
8. 土倉事務所へ日本生態学会誌 73 巻 1 号印刷費として 334,400 円を支払った (6 月 26 日)
9. 土倉事務所へニュースレター No.60 編集費として 138,600 円を支払った (6 月 26 日)
10. 国際文献社へ会員管理委託費 4～6 月 3,034,372 円を支払った (7 月 11 日)
11. 土倉事務所へ保全生態学研究 28 巻 1 号印刷費として 1,766,655 円を支払った (8 月 3 日)
12. 国際文献社へ全国・北海道地区・近畿地区ウェブ選挙費用として 459,800 円を支払った (8 月 5 日)
13. 国際文献社へ会員管理委託費 7～9 月 386,538 円を支払った (10 月 12 日)
14. 共立出版より「現代の生態学 7 エコゲノミクス—遺伝子」印税として 229,636 円の入金があった (10 月 18 日)
15. ESJ71 交流ツール SpatialChat 使用料として 743,743 円を支払った (11 月 10 日)
16. イギリス生態学会展示テーブル費用として 171,854 円を支払った (11 月 28 日)
17. みずほファクターより 2024 年会費口座自動引落分として 3,126,770 円の入金があった (12 月 12 日)
18. 国際文献社へ会員管理委託費 2023 年 10-12 月分として 903,867 円を支払った (1 月 16 日)
19. 土倉事務所へ日本生態学会誌 73-2 印刷費として 447,040 円を支払った (1 月 17 日)
20. 土倉事務所へ保全生態学研究 28-2 印刷費として 2,465,100 円を支払った (1 月 17 日)
21. 東京化学同人より生態学入門 2 版出版印税として 365,120 円の入金があった (1 月 25 日)
22. (株) ワタナベ流通より寄附の申し出があり 50 万円の入金があった (1 月 26 日)
23. 2023 年度の会計監査が Web 会議システム (Zoom) で行なわれ、会計は適正に行なわれたことが確認された。(2 月 8 日)
24. (株) シンク・ネイチャーより自然史研究振興賞賞金の寄附申し出があり 20 万円の入金があった (2 月 22 日)

2. 大会企画委員会

◎大会開催方針概要

- ・生態学会全国大会としては初のハイブリッド方式を採用した。
- ・前半 (3/16-17) はオンラインのみ、中日 (3/18、授賞式と受賞講演) は関内ホール、後半 (3/19-21) は横浜国立大でハイブリッドという変則形式とした。

- ・ポスター発表は全演者が前半日程にオンライン発表をした後、希望者から抽選で当選した方 (学生優先) は後半日程にオンサイト発表できるという形式とした。

新しい試み

- ・生態学会全国大会としては初のハイブリッド方式を採用。
- ・公募セッション(テーマ公募型シンポ)を実施した。
- ・大会 X 報といった大会概要について時期を決めて冊子体(pdf)を発行することを廃止 代わりに web で随時情報更新する形式にした。
- ・オンライン関係に対応する部会を新設した。
- ・口頭発表について原則ビデオ事前提出とし、大会開始時点から視聴可能に。
- ・申し込みシステムから大会プラットフォームへの移行を考慮し、要旨締め切りを 1 月末に早めた(発表申込は例年どおり 10 月中)。

◎大会申込状況

回	開催地	一般講演			ポスター 高校生	集会				合計
		ポスター	口頭	合計		シンポ	フォーラム	企画集会	自由集会	
64	東京	955	264	1219	52	14	9	17	35	75
65	札幌	899	216	1115	45	19	7	17	29	72
66	神戸	918	269	1187	81	21	12	-	32	65
67	名古屋	928	295	1223	60	31	7	-	29	67
68	岡山	708	224	932	35	17	11	-	20	48
69	福岡	848	235	1083	49	28	9	-	23	60
70	仙台	683	241	924	68	10	10	-	20	40
71	横浜	709	227	936	63	20	9	-	21	50

回	開催地	参加者			
		一般 (有料)	学生 (有料)	その他	合計
65	札幌	1140	745	421	2306
66	神戸	1187	816	796	2799
67	名古屋	874	734	299	1907
68	岡山	1110	799	803	2712
69	福岡	1093	861	758	2712
70	仙台	1005	736	749	2490
71	横浜	1016	727	709	2452

◎大会実施に向けた課題

- ・オンサイト参加者人数が読めない (会場キャパを超えることを祈るのみ)。
- ・久々のオンサイトのため現地対応に関するノウハウが消失。トラブルシューティングが心配。特に子連れ対応は不安。

◎引き継ぎ課題 (委員長としての私見)

- ・社会的ニーズ等を考慮するとハイブリッドは望ましいし、企画委員会内でのアンケートでも前向きな意見が多いが、金銭面を含め準備の負担は片方のみより圧倒的に大きい (特に実行委員会関係)。ハイブリッド開催をする場合は参加費の値上げ、サービス

の低下をセットで検討していく必要がある。

- ・同、子連れへのサポートは重要だが、かなり負担が大きい。現場負担を減らすためには、学会から金銭的に大きなサポートをして専門業者に外注する覚悟が必要ではないか。
- ・発表者数（特にポスター）の増加に伴う会場キャパ肥大化への対応として今回の方式は悪くないと思うが（ポスターオンサイト数を制限し、超えた場合は抽選）、参加者のモチベーション的には難しい。今回もポスター発表について、過半数がオンサイト発表希望であった。一方、口頭発表はオンラインでも案外満足度が高いように感じる。

（文責：大澤剛士）

3. Ecological Research 刊行協議会

2024年3月13日（水）15:00-17:00に刊行協議会をオンラインで開催し、編集長、副編集長、出版担当理事、前編集長、編集幹事12名、編集委員19名、ワイリー・ジャパン2名、編集部7名、オブザーバーとして会長および副会長が出席した。

1. 出版・編集状況

- ・Vol. 38（2023）では計72報、853ページを出版した。（※Vol. 37は計80報、799ページ）
- ・2023年の投稿数は263報：世界的にOA誌が急増したことを背景に、2018年より投稿数が減少しており、現在も低い水準にある。日本からの投稿数（72報）に大きな変化はないが、国外からの投稿数が下げ止まっている。国際的な認知度の向上が課題である一方で、会員が情報発信する場として有益な環境を整え、支援していくことも重要だと考えている。会員の皆様には論文の投稿および特集の企画を積極的にご検討いただきたい。
- ・受理数は58報：採択率が26%とやや低下したが、日本からの投稿は高い採択率（>60%）が維持されている。投稿からFirst Decisionまでの日数（35日）に変化はないものの、受理までの日数（167日）がやや増加したほか、日本人査読者の割合が高い水準にある。査読時間と査読の国際化について、編集委員で問題点を共有し、改善を図っていくことが確認された。
- ・Journal Impact Factor（2022）は2.0で前年から変化はなかった。カテゴリ全体でJIFが低下しており、JIF Rank（Ecology）は103/171（Q3）と上昇した。
- ・オープンアクセス（OA）論文は16報（23.8%）で、前年よりも減少した（2022年は27.5%）。会員の皆様にはOA費補助を活用していただきたい。

年	2019	2020	2021	2022	2023
投稿数	309	263	267	244	263
受理数	92	99	76	76	58
受理率	33%	34%	30%	33%	26%
Journal Impact Factor	1.58	1.917	2.056	2.0	-
JIF Rank Percentile	36.39	32.83	30.35	40.1	-

2. 編集体制

- ・2024年1月より編集長として富松裕（山形大学）、副編集長として兵藤不二夫（岡山大学）、編集幹事として藤井佐織（森林総合研究所）、今井伸夫（東京農業大学）、横溝裕行（国立環境研究所）、編集委員としてJihua Wu（Lanzhou University）が就任した。

3. Ecological Research Award 2023 受賞論文

- ・編集委員および編集幹事の投票により5論文を選考し、理事会の承認を経て決定した。

4. 冊子体の廃止について

- ・日本生態学会を通じた冊子体の配布は廃止となる見込みである。

5. 特集企画

- ・国際会議に関連して、蛇紋岩と酸性雨をテーマとした企画の掲載が予定されている。
- ・特集企画では、関連する論文をまとめて掲載することで認知度の向上が期待されるほか、1報は日本生態学会の負担によりOAとなる。特集企画をお考えの方は、ぜひ編集部にお問い合わせいただきたい。

6. Author Guidelinesの一部変更等

- ・Data Articlesのガイドライン（特にデータファイルの形式について）が一部変更された。

7. OA費補助について

- ・日本生態学会員を責任著者としてERに論文を発表する場合のOA出版補助が始まり、利用が進んでいる。

（文責：富松裕）

4. 日本生態学会誌刊行協議会

編集委員会（26名）は2023-2025年任期の2年目になります。刊行協議会を2023年1月19日にメール回覧で行いました。和文誌事務局の改善について、保全生態学研究編集委員長・幹事と2023年2月22日にオンライン会議で検討しました。

【報告事項】

発行状況：74巻1号を2023年3月に発行する予定です。年2号（3月と9月）、電子版をJ-Stageで公開し、冊子版300部を発行しています。冊子購読会員は年間2,000円、一般販売は2,500円/冊（保全生態学研究と同額）の価格となっています。

73巻（2023年）発行状況

	原著論文	総説論文	学術情報	コメント	合計	頁数	備考
1号	0	0	4	0	4	32	うち連載2記事
2号	0	4	0	0	4	46	うち特集1（4記事）
計	0	4	4	0	8	78	

2021年71巻は126頁、2022年72巻は214頁でした。2010年代の400頁前後にくらべて頁数は大幅に減りました。

編集状況 (2024年3月11日)

受付年	段階	原著	総説	情報	コメ	合計
2020	審査中	0	0	0	0	0
	却下	1	2	0	0	3
	受理	5	4	11	6	26
	合計	6	6	11	6	29
2021	審査中	0	0	0	0	0
	却下	6	3	0	0	9
	受理	0	5	6	2	13
	合計	6	8	6	2	22
2022	審査中	0	0	0	0	0
	却下	0	0	1	0	1
	受理	0	4	5	1	10
	合計	0	4	6	1	11
2023	審査中	0	0	0	0	0
	却下	0	0	1	0	1
	受理	1	12	11	4	28
	合計	1	12	12	4	29

2024年の受付原稿は、まだありません。2023年までに受け付けた原稿は、すべて審査が終わりました。2022年まで投稿数が減っていましたが、2023年は回復しました。

和文誌事務局の充実

保全生態学研究とともに、受理原稿の早期公開や、効率的な発行作業ができるよう、和文誌事務局の改善を検討しています。

(文責：永光輝義)

5. 保全生態学研究刊行協議会

保全生態学研究編集委員会 3月期 報告

日時：2024年3月14日 15:00-16:00 zoom オンライン

参加者：丑丸、大澤（剛）、石濱、大澤（隆）、今藤、岸本、楠本、小池、小山、佐伯、佐々木、東城、戸田、露崎、中濱、松崎、森田、山浦、横溝、橋口（事務）

議事

- 編集委員の交代、退任、新規着任の報告および編集状況を報告した
2024年1月をもって、委員長が小池文人氏から編集幹事の丑丸敦史に交代、編集幹事が丑丸敦史から大澤剛士氏に交替した。編集幹事の西廣淳氏、委員の金子信博氏、岡野隆宏氏および鈴木覚氏が退任され、新たに大澤隆文氏、久保雄広氏および宮下彩奈氏が編集委員に就任した。
- 全文XML公開についての現状報告
全文XMLの公開について、事務担当の橋口さん、前編集委員長の小池さんの尽力で前進している。現状では公開までの時間がかかっているが、お二人で課題を解決していただいている。

- 編集方針および新しい論文タイプの検討
大幅な改訂を必要とする論文の取り扱いについて保全を实践する上での最新技術や工夫などを扱う新項目を検討
- アルバイト雇用
増大するオンライン作業への対応や校正が主な仕事のアルバイト（博士課程学生、ポスドクなど）の募集の検討。編集幹事と事務担当者とともに編集会議を行う。
- 投稿者向けのアンケートを行い、改善点を明らかにする。

出版状況

2024 新規投稿 2 編：審査中 2 編
2023 新規投稿 34 編：受理 16 編、却下・取り下げ 5 編、審査中 13 編
2022 新規投稿 35 編：受理 27 編、却下・取り下げ 7 編、審査中 1 編
2021 新規投稿 35 編：受理 30 編、却下・取り下げ 5 編

(文責：丑丸敦史)

6. 自然保護専門委員会

日時：2024年1月29日 15:00 - 18:00 リモート会議にて開催

【審議事項】

- 2023年度事業の決算について (125,013円)
- 2024年度事業計画及び予算 (アフターケア活動費用等：100,000円)
- 次期委員の選出・役員の選出 (委員長：関島恒夫、副委員長：和田直也、幹事：大久保奈弥)
- ため池防災特措法に基づく防災事業における堤体植生配慮の要望書 (案)
→今年度第4回理事会にて承認 (2024年2月17日開催)
- 中国電力の上関使用済み燃料中間貯蔵施設 (仮称) の環境影響評価に関する要望書 (案)
→今年度第4回理事会にて審議 (2024年2月17日開催) →継続審議
- 自然保護専門委員会ホームページの更新等について
- その他

【報告事項】

- 自然保護専門委員会の活動報告 (2023年度)
- 地区会報告
- 作業部会報告
- アフターケア委員会報告
- その他

(文責：和田直也)

7. 将来計画専門委員会

開催日時：2024年3月13日 (水) 13:00-15:00

場所：オンライン

出席者 (敬称略)：石川、大竹、黒川、佐竹、佐藤、塩尻、田中、辻、土居、藤岡、三木、山道
欠席者 (敬称略)：巖佐、石井、粕谷、北島、小泉、鈴木、

立木、彦坂、酒井、矢原
オブザーバー：鏡味、宇野、潮

報告事項

(1) 若手支援

- ・昨年度に引き続き「今日はモアイにいこう」をフォーラムとして企画し、16名のメンターに協力をいただいた。26名のメンティーから応募があった。横浜国立大学の会場では初の対面交流会を開催する予定である。ランチ片手に気軽にお越しください。
- ・外国籍の方、ERシンポジウムで海外から招聘した方々にも今後積極的に参加をしていただく工夫をしたい。

(2) 国際化・多様性促進

- ・年大会における英語発表数の増加など、学会の国際化は着実に進んでいる。その一方で、日本生態学会の国際的なプレゼンスは高いとはいえない。今後、さらに海外から大会参加者や、日本で研究をする生態学分野の若手研究者を呼び込むために、学会HPでの大会案内（英語）の充実、job postingやJSPS海外特別研究員応募要項の周知ができるのではないかと。また、大会の登録の際に、バイリンガル登録をすると英語検索できないという問題もある。プログラムのバイリンガル表示についてもお願いしたい。
- ・生態学会各賞の女性比率は依然として低い。応募者を増やし無意識のバイアスを排除する努力が必要である。

(3) 生態学関連分野の大型予算

- ・生態学分野は、大型予算の獲得に成功してきた。今後生態学分野の発展と国際化、および次世代の育成に必要な大型予算を、学会としても継続的かつ戦略的に獲得し連携をすることで相乗効果を目指す仕組みを引き続き検討したい。今年度のフォーラム企画は叶わなかったが、次年度には計画したい。

(文責：佐竹暁子)

8. 生態教育専門委員会

1) 委員長、副委員長の交替、委員の枠移動と新委員の就任

任期の終了に伴い、委員長が中田兼介氏から現副委員長の丑丸敦史氏に、副委員長が丑丸敦史氏から平山大輔氏に交替する。また、高校教員枠委員だった宮田理恵氏が地方独立行政法人北海道立総合研究機構林業試験場に異動したことに伴い非教育学部系枠委員となる。また、新たな高校教育枠委員として藤井新次郎（福岡雙葉中学校・高等学校）氏が就任する。

2) 2024年度の計画

1. 生態学会大会でのフォーラムの企画・開催
2. 一般教養向けの教科書「教養の生態学（仮）」の作成
3. SSH生徒研究発表会での生態学会の広報活動
4. 日本生態学会誌での連載「生態教育の今と未来」の継続を行う。

総会への報告を要しない事項

2023年度活動報告

1. オンライン合宿（2022.9.1）と大会前の打ち合わせ（2023.3.12）
 - ・生態学会大会のフォーラムの内容について検討した。明日3月16日に開催予定である。
 - ・執筆の進む「教養の生態学（仮）」の今後の進行について意見交換した。
 - ・連載「生態学の今と未来」の今後のテーマについて検討した。
2. 「教養の生態学（仮）」の作成
大学の一般教養や生態学の周辺領域の仕事に携わる方、生態学を専門としない理科教員など、生態学を専門としない方たち向けの生態学の教科書を2023年度に出版する計画であったが、執筆および委員会での査読に遅れが発生しており、予定通りに進んでいない。今後、少しでも早く出版にこぎ着けられるよう、てこ入れを行いたい。
3. 高校生対象の日本生態学会ならびに高校生ポスター発表の広報
2023年度のSSH生徒研究発表会は以前と同様の開催形態に近づいたが、外部団体のブース出展は変わらずできず、広報チラシの配布のみ可能であった。そのため、日本生態学会と高校生ポスターについて、のチラシを作成し配布いただいた。
4. 連載「生態教育の今と未来」
2023年度は掲載がなかった。2024年度の内容・執筆者は選定済み、依頼済みである。

(文責 中田兼介)

9. 生態系管理専門委員会

○調査・提言部会

- ・提言論文「自然の賢明な活用を目指して：グリーンインフラ・NbSの推進における生態学的視点」保全生態学研究で公表；J-STAGEで公開
- ・公開シンポジウム「自然を活かす新しい取り組みーグリーンインフラ・NbSのあり方ー」開催（2023/12/23@東大農ハイブリッド）複数の基礎自治体、地域活動団体、土木学会、環境経済・政策学会、応用生態工学会、造園学会、都市計画学会等からの話題提供と意見交換；会場約50名・オンライン約100名参加

○キャパシティビルディング部会

- オンラインワークショップ「身近な生態系と教育と福祉をつなぐー自然を活かす・ともに生きる」開催（2024/1/20）学生・コンサル職員・NGO関係者など26名参加；話題提供を踏まえたグループディスカッションと共有

○全体

- ・定例会議の開催（jeconetでオブザーバ参加案内）、委員の公募、新体制の構築
- ・ESJ71でのフォーラムの開催「U07生態系管理専門委員会フォーラム「社会と学術をつなぐ窓口」を目

指して」3/19 予定

(文責：西廣淳)

10. 大規模長期生態学専門委員会

日 時：2024 年 2 月 22 日～3 月 11 日

方 法：委員間のメール交換と Zoom によるミーティング (3 月 11 日)

出席者：石原正恵 (京都大学)、伊東明 (大阪市大)、内海俊介 (北海道大学)、大手信人 (京都大学)、黒川絃子 (森林総研)、木庭啓介 (京都大学)、中村誠宏 (北海道大学)、村岡裕由 (岐阜大学)、中野伸一 (京都大学)

1. 各種研究ネットワーク、プロジェクトの活動について

JaLTER (日本長期生態学研究ネットワーク)、DIWPA (DIVERSITAS in the Western Pacific and Asia)、学術変革領域 A「デジタルバイオスフェア」(地球環境を守る統合生物圏科学)、各レベルの生物多様性観測ネットワーク (APBON、JBON、GEO BON) など、国内外のプロジェクト、ネットワークが研究活動を行っている。

JaLTER では発足以来運用しているデータベースシステムの刷新時期になっており、DIAS (データ統合・解析システム) との協力を開始した。

2. 生態学に関わる地球観測の推進に関する国際・国内動向について

地球観測に関する政府間会合 (GEO) について：現在の第 2 期 GEO10 年計画 (「GEO 戦略計画 2016—2025: GEOSS の実施」) の後継戦略である「GEO Post2025 戦略: Earth Intelligence for All」が GEO 閣僚級会合 (2023 年 11 月, ケープタウン) で採択された。気候変動や生物多様性損失、環境汚染など地球規模課題への対応のための連携の必要性が確認された。

科学技術・学術審議会、第 10 期地球観測推進部会：平成 16 年に閣議決定された「地球観測の推進戦略」から 20 年を目前に「今後 10 年の我が国の地球観測の実施方針」の検討を開始した。気候変動、生物多様性、防災・減災などの課題対応の検討が進められている。

【新年度の活動計画】

1. JaLTER/ILTER

Open Science Meeting: 2024 年 7 月下旬、高山サイトで開催予定

2. その他、各ネットワーク、プロジェクトの活動についての情報交換を随時行っていく。

3. 2023 年度に開催された生態学会データベース検討タスクフォースからの答申を基に、日本の生態学における情報インフラの整備方針を具体化する。

(文責：大手信人)

11. 野外安全管理専門委員会

日 時：2024 年 3 月 7 日～3 月 13 日 メールにて実施

参加者：飯島、奥田、鈴木、粕谷、北村、石原、中島

● 2023 年度活動報告

- ・野外調査時の事故についての情報を収集した。
 - ・新たな事案は特になし。
 - ・71 回大会でのフォーラム開催の準備を進めた。
 - ・安全管理マニュアルの改訂と出版に向けての準備を進めた。
- 詳細については、2024 年度活動予定を参照。

● 2024 年度活動予定

- ・72 回大会でのフォーラムとポスター展示の準備を行う。
- ・フォーラム内容の動画配信の検討を引き続き行う
- ・事故情報の収集と集約
- ・野外調査・実習中の事故やヒヤリハット事象の例を引き続き収集し、解析を続ける。
- ・該当の事例があれば、野外安全管理委員会に連絡をいただきたい。また、事故の報告書が大学・研究所等で出版された場合は、ご教示ください。
- ・和文誌の『フィールド調査における安全管理マニュアル』の配布
- ・在庫がかなりあるので、高校や研究機関、および会員への配布を引き続き行う。必要な場合は、連絡をお願いします。
- ・安全管理マニュアルの改訂と出版を行う。
- ・最新の情報と技術へのアップデートを行ったうえで出版する。

企画概要

出版社：朝倉書店

書 名：フィールド調査のための安全管理マニュアル

監 修：日本生態学会

A5 判 総頁 190 頁 (本文 170 頁) 本文モノクロ印刷

予価 2800 円+税 ※もう少し高くなる可能性あり 印税 4% ※価格との関係で、変更の可能性あり

2024 年 8 月末原稿締め切り、2025 年春刊行予定

印税

- ・和文誌の安全管理マニュアルの改訂ということもあり、著者は受け取らずに、すべて学会の収入とする。
- ・書籍の価格を抑えて多くの人に購入してもらえるように、印税は一般的な割合より少なく設定されている。

コピーライトについて

- ・和文誌の CC BY 4.0 ライセンスに基づいて出版物を制作・出版する。
- ・元のマニュアルが CC BY 4.0 であることのクレジットを本の中で行う。
- ・出版されたマニュアルは CC BY 4.0 とすることは商業出版としては難しいが、元のマニュアルと重複する内容・情報については、他の方が元のマニュアルの CC BY 4.0 ライセンスに基づいて再利用を行うことは妨げない。

(文責：石原道博)

12. キャリア支援専門委員会

(文責：村岡裕由)

【2023 年度活動報告】

1. 横浜大会での企画 (全オンライン)
 - ・キャリア支援フォーラム U05 3/17 12:15-13:45 Room B
 - ・「生態学分野のダイバーシティ：誰もが参加しやすい学術空間の実現に向けて」
 - ・企業等の就職関連情報 (大会 HP へのリンク掲載)
 - ・託児補助運営サポート (託児利用補助、会場内への託児室設置)
 - ・CPD 認定プログラムの登録 (シンポ 4 件、フォーラム 2 件、自由集会 5 研) と受講証明書の発行
2. その他
 - ・男女共同参画学協会連絡会運営委員会への参加 (年 3 回)
 - ・男女共同参画学協会シンポジウムへの参加・報告書作成
 - ・女子中高生夏の学校でポスターを掲示、キャリア相談会へ参加、講師による実習を実施、学会ニュースレターに報告
 - ・男女共同参画学協会連絡会幹事学会タスクフォースへの協力
 - ・生態学会ダイバーシティ宣言の草案作成

【来年度の活動計画】

1. 札幌大会での活動
 - ・キャリア支援・男女共同参画フォーラム
 - ・キャリア支援相談室 (個別面談、イベント)
 - ・企業等の就職関連情報 (大会 HP へのリンク掲載)
 - ・託児支援サポート → 学会会場への託児室設置の準備負担が課題
 - ・CPD 認定プログラムの登録と受講証明書の発行
2. その他の活動
 - ・ダイバーシティ宣言に対応する取り組みの強化
 - ・男女共同参画学協会連絡会運営委員会への参加 (年 4 回程度)
 - ・男女共同参画学協会シンポジウムへの参加 (年 1 回)
 - ・女子中高生夏の学校への応募支援

(文責：上野裕介)

13. 情報交流支援専門委員会

Jeconet の運営状況について

会員数：3661 人 (3 月 1 日現在)

配信数：2545 件 (ッ)

- ・研究情報の交流、シンポジウムなどのイベント案内、生態学が関係する職業に関する求人案内など、活発な情報交換に活用されている。
- ・委員会では Jeconet に配信される全てのメールを確認している。管理運営上の大きな課題は生じていないが、会員からのメール配信確認、メールアドレス登録・変更等に関する問い合わせは多数あるので、委員はこれらに対処している。
- ・Jeconet 会員ならびに日本生態学会会員には、日本生態学会ホームページでの Jeconet 関連ページ (入退会方法の案内、会員ガイドライン) を確認するようにお願いしている。

14. データベース検討タスクフォース

- (1) 2023 年 7 月 22 日 日本生態学会理事会に「とりまとめ報告書」を提出
 1. TF の位置づけ
 2. 状況分析
 - 2-1 ER Data Paper
 - 2-2 学会としてデータベースを構築維持する可能性
 - 2-3 サイエンスと社会の現状
 3. 今後の対応
 - 3-1 JaLTER DB の DIAS への移行
 - 3-2 人材育成とデータベース利活用の推進
- 文科省事業である DIAS (Data Integration and Analysis System Program データ統合・解析システム) において運用される計算機資源を利用して JaLTER DB を持続的に運用できそうな見込み。DIAS 事業は JAMSTEC を事務局とし、東大、京大、NII、早大、北見工大が参加して実施され、地球環境観測に関わるデータベースの運用・公開、データ群を用いた解析環境の提供が行われている。以前から生態学的情報を DIAS で取り扱いたいという希望が DIAS 側からある。現在、移行の準備が (技術的に) 進められている。
- 生態学会としては、DIAS 側との協定文書、および DIAS 運用へのコミットメントが必要になってくる。
- 人材育成とデータベースの利活用 (特に、社会システムに還元されるような) が重要。
- (2) フォーラムの開催 2024 年 3 月 20 日 「生物多様性データ基盤の進展・課題・これから」
 - データ統合解析システム (DIAS) での生態系データベースと気候変動データの連携に向けて 石川洋一 (JAMSTEC)
 - 環境 DNA 観測網「ANEMONE」とオープンデータ戦略 近藤倫生 (東北大)
 - 日本生物多様性観測ネットワーク (JBON) について 西廣淳 (国環研気候変動適応センター)
 - JaLTER データベースの役割とこれからのについて 大手信人 (京都大)
- (3) 今後、理事会、専門委員会 (大規模長期・情報)、ER を中心に、上記事項の進展が図られるものと考ええる。

(文責：内海俊介)

15. 監査報告

一般社団法人 日本生態学会
監事 大塚俊之・瀧本岳
当法人の 2023 年度の事業計画、計算書類、これらの附属明細書、そのほか理事の職務執行の監査について、次の通り報告する。

1. 監査の方法及びその内容

2023 年度を通じ、各監事が必要な調査を行い、その結果を監事間で協議して監査を実施した。具体的に

は、すべての理事会に Web 会議システムで出席し、重要な報告書等を随時閲覧した。また、事前に資料を電子媒体で受領した上で、2024 年 2 月 8 日に学会事務局と Web 会議システムで接続し、関係する会計書類を逐次閲覧した。さらに、必要に応じて、これらの内容について関係する理事に説明を求めた。

2. 監査の結果

- (1) 事業報告書及びその附属明細書は法令および定款に従い当法人の状況を正しく表示している。
- (2) 理事の職務の遂行に関し、不正の行為もしくは定款に違反する重大な事実はない。
- (3) 計算書類とその附属明細書は当法人の財産および損益の状況をすべての重要な点において適正に表示している。

16. 英文誌出版状況報告

英文誌 3 誌出版体制

2024 年 1 月より、日本生態学会は Ecological Research (ER 誌) に加えて、Population Ecology (PE 誌)、Plant Species Biology (PSB 誌) の出版元となった。それに伴い、会則の改定や出版体制の整備を進めている。今後の 3 誌の運営については、ESJ71 において 3 月 17 日 12:15-13:45, Room A で開催予定のフォーラム「日本生態学会が出版する 3 つの英文誌の将来像 運営と編集方針について」で、3 誌の編集長を交えて公開討論を行う。

OA 出版補助制度

2023 年 4 月から、会員の ER 誌での OA 論文出版費用を補助し、自己負担額 18 万円で出版できる制度を開始した (<https://esj.ne.jp/er/authors.html#OASubsidy>)。2024 年 3 月 13 日までに 5 件の利用があり、問い合わせも増えている。学会からの OA 費補助は、責任著者の所属機関と Wiley 社が OA 出版契約している場合には原則として適用外となる(システム上、機関契約が優先される)。国内主要大学で Wiley 社との転換契約が進み、学会からの OA 費補助の数は想定内に収まっている。なお PE 誌、PEB 誌についても OA 費補助制度は適用されることになった。また、地区会や他学会が、自己負担額分を負担し、OA 費の著者負担を無くす仕組みも導入されつつある。

英文冊子体廃止の経緯

英文誌冊子体購読について、日本生態学会と Wiley 社との契約書では次のように規定されている。

8.2 会員向け冊子版

会員には本出版社の指定する vendor を通じて本ジャーナルの個人向け冊子購読がセルフサービスとして割引料金で提供される。割引料金は本出版社が本学会に提供する「割引コード」によって利用でき、本学会が割引コードを会員に配布する。割引コードは本学会の会員のみが使用でき、会員以外への配布や会員以外による使用は禁止される。

日本生態学会は 2024 年から英文 3 誌の出版元とな

っているが、学会を通じて冊子体を配布しているのは ER 誌のみであり、PE 誌では冊子体の配布は無く、PSB 誌は電子ジャーナルであるため冊子体の出版自体が無い。

2023 年 12 月 1 日に、2024 年 1 月より Wiley 社が直接管理していた冊子体販売を米国の Sheridan 社に委託する、ER 誌と PE 誌の冊子注文はオンラインサイトから行い、注文時に割引コードを入力することで通常価格から 8 割引となる、との連絡が Wiley 社からあった。実際に発注する段階で、ER 誌 \$1,124.14、PE 誌 \$764.47 という価格が提示され、8 割引きでも 1 号 ER 約 3 万円、PE 約 2 万円となり、配送費を含めるとさらに金額が上昇することが想定された(ただし、海外出版の国際誌の相場と比較して、著しく高価ということはない状況)。

この変更について、Wiley 社からの事前連絡に問題があった点を指摘した結果、2024 年出版分については Wiley 社の電子データを利用して印刷・製本した冊子を日本で作成して、会員に配布する事は認める、との返答を得た。なお、現時点で、2024 年 1 号の冊子体については発注しておらず、冊子体を希望指定している会員には状況説明の手紙を送付している。今後の対応について理事会で検討した結果、冊子体廃止が提案されている。

BES2023 出展報告

昨年に引き続き、12 月 12 日から 15 日に開催された英国生態学会年会 BES2023 に日本生態学会(英文誌 3 誌)の宣伝ブースを出展した。3 誌の紹介パンフレット、生態学会のノベルティー(クリアホルダー)配布や、大型液晶ビジョンを利用した宣伝資料の投影など、積極的な広報・学会間交流を行った。生態学会代議員及び英文誌出版 TF メンバーとして、黒川紘子さんに現地出展を担当していただいた(学会による旅費負担)。他に、BES に参加した星崎和彦さん、滝本岳さん、森章さんにも現地対応で協力していただいた。黒川さんからは詳細な報告書を提出していただいた。

生態学会大会における海外参加者の旅費支援制度の提案

BES におけるブース対応の結果、海外若手研究者の日本生態学会大会参加への旅費支援のニーズの高さが再度、明らかになった。生態学研究の国際交流を進め、共同研究を増やす意味でも、ER シンポ以外の旅費支援枠の設定は、大きなメリットがあると判断される。海外の学会でも旅費支援制度はあり、海外会員の活性化という観点からも検討が望まれる。

DRYAD からの提案

Data Dryad と figshare はデータファイルを保管するための汎用リポジトリで、どちらも Scientific Data の推奨データリポジトリとなっており、データペーパー(Data articles)の運用に必要なデータ登録条件を満たしている。

- * 公開された形式でのデータセットの長期的な永続性と保存を保証。
- * 送信されたデータセットに安定した識別子 (DOI) を提供。
- * ログインやペイウォールなどの障壁なしでデータへのパブリックアクセスを許可。
- * オープン ライセンスのサポート (CC-BY、またはそれらと同等のライセンス)

ER 誌で Data paper を開始した時点では、日本でこの条件を完全に満たすリポジトリを利用することは現実的ではなく、国立環境研究所の JaLTER データベース (DOI 無し) から有用データを公開するという方針であった。その後、データ登録についてはより信頼性の高い figshare や Data Dryad の利用を促すよう検討してきたが、開始当時の経緯から移行が進んでいない。国環研のデータベースサーバの利用方法が変わることもあり、今後の対応を至急検討することが求められている。また、BES2023 では Dryad から直接説明があり、学会宛に利用提案書が送付されている。Dryad の Data curator のサポートや、Dryad database に入ることによって article 自体の visibility が高まることが期待され、英文誌編集部としてもデータ管理についてのサポート業務が軽減される。一方で、国内データリポジトリを継続的に利用するという立場であれば、JaLTER データベースの DOI 付与を早急に進めるよう働きかける必要がある。

(文責：出版担当理事 久米篤)

B. 審議事項

第 1 号議案 役員退任に伴う改選に関する件

以下の役員候補者の改選について満場異議なくこれを可決承認した。

- ・任期満了により退任する役員 (任期：2022.3 総会後～2024.3 総会まで)

理事：宮下直、北島薫、久米篤、木村恵、村岡裕由、吉田丈人、近藤倫生、辻和希、鏡味麻衣子、佐竹暁子、日浦勉、酒井章子、工藤岳、小泉逸郎、鈴木牧、中野伸一、和田直也

監事：瀧本岳

- ・理事会推薦役員候補者 (任期 2024.3 総会後～2026.3 総会まで)

理事：北島薫 (再任)、日浦勉 (再任)、久米篤 (再任)、木村恵 (再任)、村岡裕由 (再任)、相場慎一郎、石濱史子、森章、小林真、東樹宏和、竹垣毅、工藤岳 (再任)、土居秀幸、西廣淳、中野伸一 (再任)、吉田丈人 (再任)

監事：黒川紘子

- (参考) 上記以外の任期中の役員 (任期：2023.3 総会後～2025.3 総会まで)

理事：立田晴記 (専務理事)、赤坂宗光 (庶務担当)、辻かおる (会計担当)

監事：大塚俊之

- ・正会員の投票による理事兼代表理事・会長候補者：北島薫

第 2 号議案 定款の変更に関する件

定款の変更案について以下の提案があり、その承認を求めたところ、満場異議なくこれを承認可決した。

【定款変更案】

第 1 章 総則 (目的)

第 3 条 当法人は、生態学の進歩と普及を図ることを通じて、社会に貢献することを目的とし、その目的に資するため、次の事業を行う。

- (1) 学術集会、研究集会、講演会、講習会等の開催
 - (2) 学術雑誌及び機関紙等の発行
 - (3) 生態学に関する研究、調査、教育及び研修
 - (4) 研究業績の表彰及びその他研究の奨励
 - (5) 内外の関係学術団体との連絡及び提携
 - (6) その他、当法人の目的を達成するために必要な事業
- 第 3 章 代議員総会 (会員への通知)

第 13 条 総会の議事の要項及び議決した事項は、この法人が発行する機関紙等にて会員に通知する。

※定款全文 <https://esj.ne.jp/esj/Rule/Teikan.html>

第 3 号議案 会費変更に関する件

英文誌冊子体の廃止およびの入会及び会費規則変更案について以下の提案があり、その承認を求めたところ、満場異議なくこれを承認可決した。

【入会及び会費規則変更案】

第 8 条

本法人の会員の会費は、次のように定める。

	会費	英文学術雑誌 オンライン購読*	大会発表	選挙・被選挙権 (代議員)
正会員 (一般)	9500 円	○	○	○
正会員 (学生)	4500 円	○	○	○
賛助会員 (個人・団体)	20000 円	×	×	×
名誉会員	0 円	○	○	×

冊子体購読

本法人の正会員には、希望があれば、次の学術雑誌の冊子体を各 2000 円で配布する (送料込)。

- ①日本生態学会誌 (年 2 回発行)
- ②保全生態学研究 (年 2 回発行)

* 英文学術雑誌オンライン購読

Ecological Research、Population Ecology、Plant Species Biology についてバックナンバーを含めてオンラインでの購読が可能である。

第 11 条

本法人の非会員に向けた学会誌 (冊子体) の定期購読料は、以下に掲げる年額とする。

- ①日本生態学会誌 5000 円
- ②保全生態学研究 5000 円

※入会及び会費規則全文 https://esj.ne.jp/esj/Rule/Nyukai_Kaihi2022.html

第4号議案 2023年決算承認に関する件

当期（自2023年1月1日至同年12月31日）における決算案について満場異議なくこれを承認可決した。

<一般会計>

収入の部			支出の部		
費目	23 予算	23 決算	費目	23 予算	23 決算
年会費			会誌発行費		
正会員（一般）	25,000,000	25,822,100	ER・PE・PSB	1,500,000	1,020,396
正会員（学生）	5,000,000	4,892,200	生態誌	2,000,000	781,440
賛助会員	1,400,000	1,247,000	保全誌	2,800,000	4,197,755
小計	31,400,000	31,961,300	会誌発送費用	400,000	345,128
科研費（国際情報発信強化A）	0	0	ニュースレター	300,000	254,100
学会誌売上げ	500,000	516,000	英文誌 Open Access 経費	9,000,000	5,966,252
出版印税	700,000	738,116	英文誌編集費	600,000	291,867
論文掲載料	1,500,000	897,000	和文誌編集費	600,000	673,727
広告代	20,000	20,000	小計	17,200,000	13,530,665
著作権使用料	200,000	564,507	会議費	300,000	305,906
大会収入	10,000,000	9,633,500	旅費・交通費	1,000,000	893,800
講習会費	0	0	人件費	16,500,000	16,957,983
寄附金	0	0	地区会活動費	1,831,544	1,964,870
その他	2,000	2,024	大会支出	13,000,000	11,323,229
前年度繰越金	110,746,740	110,746,740	個体群生態学会出版企画費	350,000	350,000
			INTECOL 会費	300,000	0
			事務費		
			通信費	300,000	169,723
			消耗品費	400,000	167,758
			雑費	300,000	232,076
			決済代行手数料	1,000,000	767,874
			サーバ関連費	400,000	297,396
			事務所維持費	1,680,000	1,680,000
			小計	4,080,000	3,314,827
			各種委員会費	1,000,000	1,023,089
			広報費	1,000,000	844,837
			選挙費	250,000	220,647
			EAFES 費用	200,000	129,099
			講習会費	300,000	242,140
			会員管理委託費	4,600,000	4,593,757
			法人税	300,000	223,700
			次年度繰越金	92,857,196	99,160,638
合計	155,068,740	155,079,187	合計	155,068,740	155,079,187
単年度収入	44,322,000	44,332,447	単年度支出	62,211,544	55,918,549
			単年度収入 - 支出	-17,889,544	-11,586,102

<特別会計>
賞準備金

収入の部			支出の部		
	23 予算	23 決算		23 予算	23 決算
前年度繰越金	9,824,236	9,824,236	賞金		
預金利息	0	81	宮地賞	200,000	200,000
			大島賞	100,000	100,000
			鈴木賞	200,000	200,000
			小計	500,000	500,000
			雑費	0	0
			次年度繰越金	9,324,236	9,324,317
合計	9,824,236	9,824,317	合計	9,824,236	9,824,317

貸借対照表

2023年12月31日現在

一般社団法人 日本生態学会

(単位：円)

科 目	金 額	科 目	金 額
(資 産 の 部)	円	(負 債 の 部)	円
流 動 資 産		流 動 負 債	
現金及び預金	136,360,701	未払金	5,111,524
前払費用	2,426,065	未払法人税等	223,700
未収収益	308,500	前受金	29,478,510
		預り金	416,894
固 定 資 産		固 定 負 債	
特定資産 学会賞準備金資産	9,324,317	退職給付引当金	4,704,000
		負債合計	39,934,628
		(正 味 財 産 の 部)	
		一 般 正 味 財 産	99,160,638
		指定正味財産(うち 特定資産への充当額)	9,324,317
		正 味 財 産 合 計	108,484,955
資 産 合 計	148,419,583	負 債 ・ 純 資 産 合 計	148,419,583

第5号議案 2024年度予算承認に関する件

次期（自2024年1月1日至同年12月31日）における予算案について満場異議なくこれを承認可決した。

<一般会計>

収 入			支 出		
費 目	23 決算	24 予算	費 目	23 決算	24 予算
年会費			会誌発行費		
正会員（一般）	25,822,100	25,000,000	ER・PE・PSB	1,020,396	700,000
正会員（学生）	4,892,200	4,800,000	生態誌	781,440	2,000,000
賛助会員	1,247,000	600,000	保全誌	4,197,755	4,000,000
小計	31,961,300	30,400,000	会誌発送費用	345,128	200,000
科研費（国際情報発信強化A）	0	0	ニュースレター	254,100	300,000
学会誌売上げ	516,000	500,000	英文誌 Open Access 経費	5,966,252	7,000,000
出版印税	738,116	700,000	英文誌編集費	291,867	600,000
論文掲載料	897,000	800,000	和文誌編集費	673,727	600,000
広告代	20,000	20,000	小計	13,530,665	15,400,000
著作権使用料	564,507	500,000	会議費	305,906	300,000
大会収入	9,633,500	17,430,000	旅費・交通費	893,800	1,000,000
講習会費	0	0	人件費	16,957,983	17,000,000
寄附金	0	500,000	地区会活動費	1,964,870	2,084,855
その他	2,024	2,000	大会支出	11,323,229	21,470,000
前年度繰越金	110,746,740	99,160,638	個体群生態学会出版企画費	350,000	350,000
			INTECOL 会費	0	300,000
			事務費		
			通信費	169,723	200,000
			消耗品費	167,758	400,000
			雑費	232,076	300,000
			決済代行手数料	767,874	1,000,000
			サーバ関連費	297,396	300,000
			事務所維持費	1,680,000	1,680,000
			小計	3,314,827	3,880,000
			各種委員会費	1,023,089	1,000,000
			広報費	844,837	1,000,000
			選挙費	220,647	0
			EAFES 費用	129,099	0
			講習会費	242,140	400,000
			会員管理委託費	4,593,757	4,600,000
			法人税	223,700	300,000
			次年度繰越金	99,160,638	79,707,783
合計	155,079,187	148,792,638	合計	155,079,187	148,792,638
単年度収入	44,332,447	50,852,000	単年度支出	55,918,549	69,084,855
			単年度収入 - 支出	-11,586,102	-18,232,855

＜特別会計＞
学会賞準備金

収入の部			支出の部		
	23 決算	24 予算		23 決算	24 予算
前年度繰越金	9,824,236	9,324,317	賞金		
寄附		200,000	宮地賞	200,000	300,000
預金利息	81	0	大島賞	100,000	0
			鈴木賞	200,000	150,000
			自然史研究振興賞		200,000
			小計	500,000	650,000
			雑費	0	0
			次年度繰越金	9,324,317	8,874,317
合計	9,824,317	9,524,317	合計	9,824,317	9,524,317

第6号議案 第74回大会（2027年）担当地区会に関する件

第74回大会（2027年）担当地区会候補中部地区の提案があり満場異議なく承認可決した。

第7号議案 生態学会活動方針（アジェンダ）に関する件

日本生態学会活動方針（アジェンダ）改訂について提案があり、承認を求めたところ満場異議なく承認可決した。

日本生態学会活動方針（アジェンダ）

日本生態学会は、生態学とその関連分野を研究する者のコミュニティとして、研究成果の発信、会員の交流を通じて生態学を深化・発展させること、またその成果を社会に還元することを目的として活動を行ってきた。ここで、近年の社会情勢の変化に対応するために強化する活動の指針として、以下のアジェンダを採択する。

ダイバーシティとインクルージョン：生態学に関わる様々な人々の多様性を互いに認め、あらゆる属性にとらわれること無く学会活動に参加できるよう、包摂的かつ公平性が保たれた環境構築に取り組む。

次世代の育成：生態学的研究に携わる学生や若手研究者の育成、研究環境の改善、キャリア形成支援に積極的に取り組む。

国際化：学術大会および国際学術雑誌の刊行を通して一層の国際情報発信を推進する。関係学会および国際機関との交流も促進する。特に、アジアの生態学研究者どうしが交流する場としての機能を高める。

オープンサイエンスの推進：より開かれた生態学を目指し、多くの人々が論文やデータにアクセスでき、協力しながら社会から信頼される研究成果の発信に努める。

社会貢献：生態学の知識の普及に積極的に取り組むとともに、現代社会が抱える諸課題に対し生態学的見地からの提言を主体的に行う。生態学研究者と諸問題の解決に取り組む実務者との協働を促す。

他分野との横断的交流：他分野・領域との交流を積極的に行うことで、生態学をさらに深化させるとともに裾野を拡げ、知の総合において生態学が果たすべき

役割の重要性について理解を促す。

第8号議案 ダイバーシティ宣言に関する件

日本生態学会 ダイバーシティ推進宣言（案）についての提案があり、承認を求めたところ満場異議なく承認可決した。

日本生態学会 ダイバーシティ推進宣言（案）

生態学を含め科学の発展は、多様な人々による多様な観点を反映させつつ推進しなければならない。日本生態学会は、生態学分野におけるダイバーシティの重要性を認識し、以下の原則に基づき、包摂的で公平な社会の構築に努める。

1. 多様性の尊重：性別、性自認、性的指向、能力、年齢、疾病・障がい、宗教、人種、民族、文化、国籍、出身地、経済的背景、経歴、学術的視点などの多様性を尊重する。差別やハラスメントに対しては断固として立ち向かい、適切な対応を行う。
2. 公平な機会の提供：学術および職業における機会には、少数派が置かれた不利な状況があることを認識する。障壁を取り除く取り組みを推進し、ジェンダーギャップ等の不均衡を是正する。
3. 包摂的な参加：誰もが参加しやすい環境の整備を進め、合理的な配慮を行う。研究組織や大会での集会等の企画と実施においては、多様な背景をもつ研究者の参画を奨励する。
4. 理解の促進：個人あるいは組織における意思決定の際の無意識のバイアスや、多様性・公平性・包摂性の重要性に関する理解を促進する。研究会、セミナー、ワークショップなどを通じて情報共有と普及啓発を行う。

以上のように、日本生態学会は多様性・公平性・包摂性を重要な価値と位置づけ、その実現に向けて積極的に取り組むことを宣言する。

2024年3月18日 一般社団法人日本生態学会

Ⅱ. 第71回日本生態学会大会の記録

第71回日本生態学会大会はオンライン・横浜国立大学および横浜関内ホールにて2024年3月16日～3月21日に開催されました。

大会期間中に公開講演会、シンポジウム 20、自由集会 21、フォーラム 9、一般講演（口頭発表）227、一般講演（ポスター発表）709、高校生ポスター 63、ジュニア生態学講座が行われました。参加者は 2452 名でした。6 日間の日程とポスター賞・高校生ポスター賞・英語口頭発表賞受賞者は以下の通りです。

日 程

<オンラインのみ>

3月16日 開会挨拶、一般講演（口頭発表・ポスター発表コアタイム）、フォーラム、オープニングセレモニー

3月17日 一般講演（口頭発表・ポスター発表コアタイム）、自由集会、フォーラム、みんなのジュニア生態学講座

<横浜関内ホール（オンライン配信あり）>

3月18日 総会、授賞式、受賞記念講演

<横浜国立大学（オンライン配信あり）>

3月19日 シンポジウム、自由集会、フォーラム、ポスター発表

3月20日 シンポジウム、自由集会、フォーラム、ポスター発表

3月20日 シンポジウム

ポスター賞受賞者

<動物個体群 / Animal population >

【最優秀賞】

「野生動物の気象への応答を探る：時間点過程を基礎とした自動撮影カメラデータ解析」* 松岡諒（東京大学）、中島啓裕（日本大学）、宮下直（東京大学）

【優秀賞】

「ゲンゴロウの刺はどのような機能をもつか？ - 歩行・遊泳・飛翔・捕食防御の観点から -」* 秀健吾（弘前大学）、森井椋太（岩手大学）、安田晶南（弘前大学）、池田紘士（東京大学）

<動物群集 / Animal community >

【最優秀賞】

「学習の連鎖が引き起こす水田生態系における間接効果」* 上原春香、遊佐陽一（奈良女子大学）

【優秀賞】

「温暖化と殺虫剤の複合影響による上位捕食者の減少を介した生物群集と水質の反応」* 石若直人（近畿大・院・農）、平岩将良（近畿大・農）、橋本洸哉（弘前大・農生）、土屋健司、角谷拓（国立環境研究所）、早坂大亮（近畿大・農）

「肉食性スペシャリストの分布は餌の分布によって制限されるか」* 早坂拓海（弘前大学）、奥崎稜（大阪公立大学）、曾田貞滋（京都大学）、念代周子（弘前大学）、池田紘士（東京大学）

<行動 / Behavior >

【最優秀賞】

「ウンコをしないオタマジャクシたち - 小さな水場を汚さない新たな適応 -」* Bun ITO、Yasukazu OKADA（Tokyo Metropolitan University）

【優秀賞】

「野ネズミによるクリ堅果の採餌行動：大胆な糞の破壊と繊細な森林環境の選択」* 梶田瑠依、梶村恒（名古屋大学）

「ナミアゲハ *Papilio xuthus* の訪花行動における色および性別に依存した局所的強調」* 渡辺旭裕、土田浩治、岡本朋子（岐阜大学）

「親はサボる子供に罰を与える？ 協同繁殖魚サボリを用いた水槽実験と野外実験の比較」* 日高諒、十川俊平、幸田正典、安房田智司（大阪公大・院・理）

<動物繁殖・生活史 / Animal reproduction and Life history of animals >

【最優秀賞】

「カダヤシ雌が放出する化学物質は同種雌だけでなく他種にも悪影響を及ぼす？」* 山崎展、鶴井香織、辻和希（琉球大学）

【優秀賞】

「ヤツメウナギのスニーカーはペア産卵を妨害するか？ 繁殖成功度を高めるか？」* 三枝弘典、古澤千春、岸田治、小泉逸郎（北海道大学）

<動物と植物の相互関係 / Animal-plant interaction >

【最優秀賞】

「高山植物ウスユキトウヒレンにおける自殖性と種子食害の関係」* 鈴木暁音、工藤岳（北海道大学）

【優秀賞】

「せっかち派 vs. 慎重派：マルハナバチの採餌戦術は学習速度の個体差で説明できるか？」* 竹内希海、大橋一晴（筑波大学）

「植物の三密戦略：密集花序が多様な訪花昆虫による送受粉に及ぼす影響」* 田中歩、大橋一晴（筑波大学）

<植物個体群・群落 / Plant population and Plant community >

【最優秀賞】

「海浜植物シロヨモギの地理的遺伝構造と過去の分布変遷」* 阿部春乃、武田浩太（新潟大学）、玉木一郎（森林文化アカデミー）、長谷川陽一、内山憲太郎（森林総合研究所）、森口喜成（新潟大学）

【優秀賞】

「小面積開花後 11 年間のクマイザサ実生個体群の動態」* 小川りさ、大倉知夏（秋田県立大学）、井上みずき（日本大学、秋田県立大学）、工藤恵梨（秋田県立大学）、松下通也（森林総研・林木育種セ、秋田県立大学）、坂田ゆず、木村恵、蒔田明史（秋田県立大学）

「散布者が形成する糞内種子群集：哺乳類の採餌様式が実生の競争環境を決める？」* 井上輝紀（弘前大学）、奥田圭（広島修道大学）、坂本祥乃、宮本留衣（株式会社テンドリル）、小林春香（WMO）、横山実咲（栃木県）、山尾僚（京都大学）

<植物繁殖・生活史 / Plant reproduction and Life history of plants >

【最優秀賞】

「ショウジョウバカマ（シュロソウ科）の繁殖形質の地域分化：本州と北海道の比較」* 中林楓、富田寛瑛（北海道大学）、和久井彬実（富山県中央植物園）、和田直

也 (富山大学)、工藤岳 (北海道大学)

<植物生理生態 / Plant ecophysiology >

【最優秀賞】

「ループかつリーか：葉の通水性が介する生育環境に応じた葉脈タイプの進化」* 佐々木陽依、山尾僚 (京都大学)

【優秀賞】

「ドローン画像を用いたヤドリギ分布における景観要因と宿主種の相互作用の解明」* 村田紗也、檀浦正子、小野田雄介、金子隆之 (京都大学)

「高山帯の樹木および低木は土壌中の無機態窒素と有機態窒素のどちらを多く利用するのか」* 諏訪竜之介、伊藤拓生、岩田拓記、牧田直樹 (信州大学)

<景観・遷移・更新 / Landscape ecology, Succession and regeneration >

【最優秀賞】

「高解像度 GIS データから解明する水鳥の移動空間として重要な河川の特徴」* 竹重志織 (放送大学)、澤祐介 (山階鳥類研究所)、島谷健一郎 (統計数理研究所)、加藤和弘 (放送大学)

【優秀賞】

「比重分画を用いた三宅島 2000 年噴火後の植生回復が表層土壌発達に与える影響の評価」* 柴沼玲那、浅野真希、上條隆志、田村憲司 (筑波大学)

「日本産マツ属樹木全種の外生菌根菌埋土胞子群集」* 阿部寛史 (東京大学)、小泉敬彦 (東京農業大学) Helbert LIM (BRIN)、奈良一秀 (東京大学)

<物質循環 / Material cycling >

【最優秀賞】

「福島県の帰還困難区域内に分布するモクズガニへの放射性セシウムの移行」* 角間海七渡 (京都大学) 和田敏裕、辰野宇大 (福島大学)、大手 信人 (京都大学)

【優秀賞】

「ボルネオ熱帯林における NP 施肥に対する材の栄養塩濃度の応答」* 高橋ひより、平野侑、加藤拓、檜谷 昂 (東京農業大学)、青柳亮太、北山兼弘 (京都大学)、今井伸夫 (東京農業大学)

「部分的菌従属栄養植物における根滲出炭素の特性評価：安定同位体分析を用いた試み」* 榮航太郎、松尾奈緒子、北上雄大 (三重大学)、牧田直樹 (信州大学)、松田陽介 (三重大学)

<生物多様性 / Biodiversity >

【最優秀賞】

「四国に多様化するイカリソウ属のニッチ分化」* 小西桃花、草竹恵実、三村真紀子 (岡山大学)

【優秀賞】

「寄生関係の多様性が生態系間エネルギー流の季節動態にもたらす影響」* Hinako ASAKURA (kyoto Univ.)、Ryo FUTAMURA、Sennri MORIYAMA、Osamu KISHIDA (hokkaido Univ.)、Takuya SATO (kyoto Univ.)

「細菌の生育環境中に存在する炭素源の種数が種間相互作用に与える影響」* 小野大樹、津留三良 (東京大学)、古澤力 (東京大学、理化学研究所)

<進化・数理 / Evolution and Mathematical ecology >

【最優秀賞】

「多反復細菌群集の統計解析から確率論・決定論過程を定量的に理解する」* 林息吹、東樹宏和 (京都大学)

【優秀賞】

「ニホンザリガニと共生ヒルミズ類の共進化史：遺伝子で紐解く 500 万年の歴史」* 今野友陽 (北海道大学)、大高明史 (弘前大学)、Stuart R. GELDER (University of Maine)、小泉逸郎 (北海道大学)

「飛翔の獲得にともなう寿命の進化に関わる遺伝的変化の探索」* 松田優樹、牧野能士 (東北大学)

「相利共生ネットワークの複雑性とレジリエンス」* 笠原剛樹、長田穰、近藤倫生 (東北大学)

<外来種 / Introduced species >

【最優秀賞】

「温暖化由来の侵入生物が在来生物にあたる影響の緯度クライン効果：トンボを事例に」* 長野光希 (近畿大学大学院・農)、平岩将良、早坂大亮 (近畿大学・農)

<保全 / Conservation >

【最優秀賞】

「再導入されたミヤマシジミ 7 局所個体群における 6 世代の動態」* 秋山礼、出戸秀典、宮下直 (東京大学)

【優秀賞】

「カブトムシにおける遺伝的攪乱の懸念：野生個体と販売個体での空間的遺伝構造の違い」* 濱野友 (兵庫県立大学)、陶山佳久、松尾歩 (東北大学)、伴光哲 (千葉県立中央博物館)、渡部晃平 (石川県ふれあい昆虫館)、山崎健史、中濱直之 (兵庫県立大学、人と自然の博物館)

<生態系管理・生態学教育・普及 / Ecosystem management, Education and popularization of ecology >

【最優秀賞】

「AI 技術を用いた生物音響モニタリング：大規模鳥類識別モデルの複数分類群への応用」* 佐藤匠、芳賀智宏、前川侑子 (大阪大学)、牛込祐司 (コンパス (株))、名波哲 (大阪公立大学)、福井大 (東京大学)、松井孝典 (大阪大学)

【優秀賞】

「岡山県旭川水系の農業用水路における二枚貝類の分布状況」* 谷口倫太郎 (岡山大学大学院)、佐藤萌袖 (岡山理科大学大学院)、森内海渡、勝原光希 (岡山大学大学院)、武山智博 (岡山理科大学大学院)、中田和義 (岡山大学大学院)

「LCA を用いた森林でのバイオチャーによる炭素隔離の評価 ～作出から生態系応答まで～」* 樽見知樹 (早稲田大学)、友常満利、進藤恵太、依田真由 (玉川大学)、吉竹晋平 (早稲田大学)

<高校生ポスター >

【最優秀賞】

「日本の旧翅目の翅の撥水性とナノ突起構造に関する研究」長坂圭悟 (神戸大学附属中等教育学校)

「地球温暖化がアカウミガメ個体群に及ぼす影響：行列モデルを用いた分析」加藤瞳子 (UTokyoGSC-Next、立

教女学院高等学校)、瀧本岳(東京大学)

「建物に巣をつくるジョロウグモに種内競争はあるのか?」徳永瑛、山内蓮、坂口太陽、和田千夏、末次愛梨、花井龍之介、宮元叶太、堀田寛翔(鹿児島県立錦江湾高校)

【優秀賞】

「ネジバナの特徴から探る植物の進化～花粉塊崩壊と赤白の花の意味～」熊谷緋沙子(千代田区立九段小学校)

「ランタナの花色変化の仕組みとその理由」来見田若奈、田村和暉、ニクライ龍之介(茗溪学園高等学校)

「アリゲモの雄における大型化した鋏角のメリットとデメリット」小林陽(芝高校)

「環境にやさしい農業に向けて: バイオチャーと落ち葉床の比較検討」高橋歩、堀田千晶、市川大和、秋山智咲、田端笑子、戸田愛子、味谷香穂、棚澤由実菜(東農大三高校)

「モチツツジはなぜ昆虫を捕らえるか～モチツツジは食虫植物かどうかの検証～」長谷川天哉、相曾雄斗、呉曉峰、水谷菜白、北島知果、瀬下天童(浜松学芸高校)

「スマイレ科ミヤマスマレ節の分子系統解析と生態学的ニッチモデリング」平島柑奈、西角心香、藤井風綺、馬越ひかり(小野高等学校)

「熊本におけるヌマエビ類に共生するエビヤドリツノムシ2種の生息状況」右田秀翔、西坂彩菜、矢立唯真、大里侑(熊本県立東稜高等学校)

【審査員特別賞】

「バイオチャー散布が銅像山における炭素収支の経年変化に与える影響」工藤良史、高橋虎嗣、金子知樹、森爽太、小山悠太(浅野中学・高等学校)

「ミミズ団子の核心に迫る」明珍若那、入江はる香(姫路西高等学校)

「近隣自然環境と学校敷地のはざままで生息する野鳥の生態調査」大塚莉心(二松学舎大学附属柏高)

「栽培様式の異なる水田における水生動物群集の季節消長」佐分利優衣、富田拓磨、三輪透也、安達優希、二宮遼斗、武田誠司(愛知県立佐屋高等学校)

「都市公園におけるヒキガエルの生態と保全」城陽太、錦織智崇、高久曜充、矢城翔宇、守田倫生、鞠子禅、佐藤暖哲(東京都立科学技術高校)

英語口頭発表賞 (English Presentation Award) 受賞者

< Animal community >

【Best English Presentation Award】

“Drastic changes in the density of three herbivore species on the Boso Peninsula” Akane KANDA, Gota YAJIMA, Yoshihiro NAKASHIMA (Nihon Univ.)

【Excellent English Presentation Award】

“Temporal, spatial, and dietary niche partitioning among snake species on Sado Island” Kiyoto SAWADA (Tsukuba Univ.), Yuka WATANABE, Kohei KOBAYASHI (Niigata Univ.), Yusuke MAGOME, Takashi KAMIJO (Tsukuba Univ.)

< Biodiversity >

【Best English Presentation Award】

“When islands are organisms: bird's nest ferns (*Asplenium nidus*) as a novel system for studying microbial community assembly” Yu-pei TSENG, Po-ju KE (National Taiwan University)

< Conservation >

【Best English Presentation Award】

“Exposure vs Experience: influence of contact with nature on pro-nature attitudes and behaviour” Yutaro AOTA (Tokyo Univ.), Yusuke YAMADA, Satomi MITSUI, Yuichi YAMAURA (RIFFP), Masashi SOGA (Tokyo Univ.)

【Excellent English Presentation Award】

“What factors determine the implementation intensity of nature-based educational programs in public greenspace?” Mizuki TAMARI (Tokyo Univ.), TAKU KADOYA (NIES), SHINYICHI TAKAGAWA (NACS-J), MASASHI SOGA (Tokyo Univ.)

< Material Cycling, Fungi and microbes and Ecosystem management >

【Best English Presentation Award】

“Development of vegetation structural complexity in an enrichment oil palm plantation (Sumatra, Indonesia)” Tatsuro KIKUCHI, Gustavo PATERNO, Dominik SEIDEL (University of Goettingen)

【Excellent English Presentation Award】

“Trait-based community assembly in early successional tropical wet forests in Ghana” Tomonari MATSUO, Masha T. VAN DER SANDE (Wageningen University), Lucy AMISSAH, Salim MOHAMMED ABDUL (CSIR-FORIG), Lourens POORTER (Wageningen University)

< Animal-plant interaction >

【Best English Presentation Award】

“Flower-breeding *Drosophila elegans* selectively uses flowers for reproduction or feeding” Munehiro KATSURA, Kohei FUJII, Kohei KAWAMURA, Yuki ISHIKAWA (Nagoya Univ.)

【Excellent English Presentation Award】

“The aggregation of herbivorous insects as a response to chemical landscapes formed through plant community structure” Haruna OHSAKI (Tokyo Metropolitan Univ., JSPS Research Fellow (PD)), Akira YAMAWO (Kyoto Univ.), Yuuya TACHIKI (Tokyo Metropolitan Univ.)

< Ecology and human culture >

【Best English Presentation Award】

“Beyond bees: a cross-country investigation into public perceptions of insect-mediated crop-pollination services” Masari DATE (Tokyo Univ.), Yuya FUKANO (Chiba Univ.), Sayed Ibrahim FARKHARY (Kabul Univ.), Kei UCHIDA, Masashi SOGA (Tokyo Univ.)

< Plant ecophysiology >

【Best English Presentation Award】

“How Gap Structures Mediate the Phenological Responses of Tree Seedlings to Decreased Snow in Boreal Forest?” Yihan CAI (Hokkaido University), Kiyoto SAWADA (Tsukuba University), Makoto KOBAYASHI (Hokkaido University)

【Excellent English Presentation Award】

“Seasonal variations in plant-perceived critical wavelength ratios: plant ecophysiological perspective” Amila Nuwan SIRIWARDANA, Atsushi KUME (Kyushu University)

< Evolution >

【Best English Presentation Award】

“Andromonoecy as a convergent resolution to intra-locus sexual conflict in bisexual flowers” Kai-hsiu CHEN, John R. PANNELL (University of Lausanne)

< Sociality • Cognitive ecology >

【Best English Presentation Award】

“Evolution of the strategy to exit relationships in cooperative game” Natsuki OGUSU (RIKEN), Wataru TOYOKAWA (RIKEN, University of Konstanz)

Ⅲ. 代表理事（兼会長）と業務執行理事の選任について

2024年3月19日に2024年度臨時理事会と第1回理事会が行われ代表理事（兼会長）および業務執行理事が選任された。

1. 代表理事（兼会長）（任期 2024年3月～2026年3月）
北島 薫
2. 業務執行理事（任期：2024年3月～2026年3月）
日浦 勉（副会長、次期会長候補）
久米 篤（出版担当）
木村 恵（男女共同参画担当）
村岡 裕由（情報/INTECOL 担当）

Ⅳ. 寄附一覧

この度は日本生態学会へご支援いただき心から感謝申し上げます。本ご厚意を生態学の進歩・発展・普及を図る活動に寄与したいと存じます。今後とも何卒より一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。※敬称略
2024年（1月～2月）

- ・株式会社ワタナベ流通（一般寄附金 50万円）
- ・株式会社シンク・ネイチャー（「自然史研究振興賞」への寄附金 20万円）

Ⅴ. 書評依頼図書（2023年11月～2024年4月）

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局（office@esj.ne.jp）までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. マーリーン・ズック、リー・W・シモンズ著 沼田英治監訳 遠藤淳訳「なぜオスとメスは違うのか 性淘汰の科学」(2023) 192pp. 大修館書店 ISBN:978-4-469-26971-0
2. 森澤正昭編「東京大学三崎臨海実験所 その歴史と未来へ向けて」(2023) 216pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-066164-5
3. C. Starr・C.A. Evers・L. Starr 著 八杉貞雄監訳 佐藤賢一・澤進一郎・鈴木準一郎・浜千尋・藤田敏彦共訳「スター生物学 第6版」(2023) 368pp. 東京化学同人 ISBN:978-4-8079-2055-6

4. A. Houtman・M. Scudellari・C. Malone 著 岡良隆・岡敦子訳「教養の生物学 第2版」(2023) 304pp. 東京化学同人 ISBN:978-4-8079-2045-7
5. 久世松菴著 東繁彦訳注・解説「全訳 家蜂畜養記 古典に学ぶ二ホンミツバチ養蜂」(2023) 280pp. 農文協 ISBN:978-4-540-23144-5
6. 土肥昭夫・伊澤雅子編「イリオモテヤマネコ 水の島に生きる」(2023) 402pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060247-1
7. 増田隆一著「ハクビシンの不思議 どこから来て、どこへ行くのか」(2024) 144pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-063958-3
8. 塚田英晴著「野生動物学者が教えるキツネのせかい」(2024) 292pp. 緑書房 ISBN:978-4-89531-938-6
9. F. メンツァー, S. フォルトゥナート, C.A. デービス 著 笹原和俊監訳「ネットワーク科学入門 Pythonで学ぶデータ分析とモデリング」(2023) 312pp. 丸善出版 ISBN:978-4-621-30898-1
10. 吉田丈人・深町加津枝・三好岩生・落合知帆編「災害対応の伝統知ー比良山麓の里山からー」(2024) 200pp. 昭和堂 ISBN:978-4-8122-2309-3

書評

国立研究開発法人水産研究・教育機構編「東日本大震災後の放射性物質と魚」(2023) 184pp. 成山堂書店 ISBN:978-4-425-88711-8

本書は、2011年3月に生じた東日本大震災に伴う福島原発事故によって環境中へ放出された放射性物質が陸水・海水に生息する漁業対象種へどう移行しているのかや、それに伴う水産業への影響について広範に記されています。そのため、これから水域の放射性セシウム動態について学ぼうとする人、研究を行おうとする人たちにとって有用な科学的知見が本書から沢山得られます。

一方、私自身は河川に生息する魚類・甲殻類・昆虫類等への放射性セシウムの移行動態について研究を行う立場にあり、馴染みのない海洋や湖沼の状況を知ることが本書を読む大きな動機になっていました。読み進めると、やはり河川で研究しているだけでは気が付かない、意表を突く記述がありました。例えば、河川水が海洋へ流入するとき懸濁物質から一部の放射性セシウムが溶出すること（コラム4）、海洋の底生魚では遊泳魚と比べ、堆積物中の間隙水の溶存態セシウム濃度がその放射性セシウム濃度に大きく影響しうること（第3章）が深く印象に残っています。こうした読後感を踏まえると、他の生態系で放射性物質に関する研究に携わる、あるいは携わろうとしている人たちにとても視野を拡張する材料として本書は有用なのではないかと思いました。

さらに読み進めると、妄想が捗るところもありました。例えば、第4章では、原発事故前から海洋に生息していたマコガレイで事故後2100～2400日でも全長と放射性セシウム濃度の相関関係が有意でない一方、事故

後に孵化したマコガレイで有意な相関関係がみられることが言及されています。定住性の高いマコガレイの生態を踏まえると、事故前から生息していた個体の結果から、底質の汚染度の不均質性は依然として高いのか？と思われました。しかし、底質の汚染度の不均質性が高いとすると、なぜ新規個体では全長と放射性セシウム濃度の関係性の中でばらつきが小さいのだろうか？という疑問もわきました。もしかすると相当にマコガレイの実効生態学的半減期が長いせいなのかな？などと思考を巡らせていました。こうした部分について、これから本書を読んでみようとする人の立場になって考えてみると、知的好奇心を刺激する「研究の芽」みたいなものを感じ取れる点も本書の特色の一つなのではないかと思いました。

また、生態学に携わる人の立場から見てみると、今回の放射能汚染によって意図せず漁獲圧が低い状態が長く続く中で、それが漁場の生物相や資源量にどう影響したのかも大変気になりました。さらに、水産物の流通量が震災前に戻るためにはまだ多くの困難が残される状況の中で、震災後の状況に合わせた資源管理のあり方について何か検討が進んでいることはあるのだろうかとも思いました。これらは、漁業活動の復興へ向けて必ずしも最優先事項ではないのかもしれませんが、より長期的な視点での影響評価、ひいては持続可能な漁業にとって重要なテーマではないかと感じました。

福島県で過ごしていると、本書の主題でもある「放射能汚染」の記憶が薄れつつあるという声をよく聞きます。その一方で、今でも渦中にあり対策が急がれる風評被害は、ある意味その対極にあるような気がします。そうした放射能汚染に関わる記憶の風化と社会的課題に関わる話題を、科学的知見にもとづき記した本書は、我々が進むべき道を考えていく上で重要な判断材料を提示しているのではないかと思います。色々な立場の読者を勝手に想像して、色々書きましたが、私自身は大変勉強になりました。本書のトピックに関心をお持ちの方に薦めてみたい一冊です。

(国立環境研究所 福島地域協働研究拠点 境優)

北野潤著 (2024) 「生態遺伝学入門」 184pp. 丸善出版 ISBN:978-4-621-30896-7 丸善出版 3,520 円(税込)

新刊案内を確認した際に、この本はぜひ読みたいと思っていた。学生の頃に所属していた研究室にはフィールドからデータ(植物の存在やその被度、その周辺環境要因データ)を取ってきて解析する人が半数、残りの半数が取ってきたサンプルからDNAを抽出し、そのデータを合わせて解析する人がいたように思う(対象とする分類群は動物から植物まで幅広かった)。私は前者だったので、お恥ずかしながら、遺伝に関する知識は大学の授業や研究室のゼミで聞きかじった程度であり、遺伝に関連した論文を読む際にわからないことがあれば、「生態学者が書いたDNAの本メンデルの法則から遺伝情報の読み方まで(井鷲・陶山 2013)」、「森の分子生態学2(津村・陶山 2012)」等を確認しながら読んでいた。しかし、ここ10年のうちにさらに多様な手法が利用さ

れるようになった印象を受けており、なにか網羅的に生態学に関連する遺伝関係の情報が記載されている本がないかと探した際に行き当たったのがこの本である。著者によれば本書は集団レベルの進化を初学者にとって重要なポイントについてできるだけ平易に説明することを目指した入門書とあり、多少つまづきながらも読了することができた。

第1章の生態遺伝学のための集団遺伝学入門では、アレル(対立遺伝子)頻度を変える基本の4要素である突然変異、移住、選択、遺伝的浮動について理解し易い図とともに解説されている。第2章の量的遺伝学入門では大きく分けて2つ存在する遺伝モデルのうち量的遺伝学について概説されている。第3章の適応進化の遺伝基盤：表現型から迫る、第4章の適応進化の遺伝基盤：ゲノムから迫る、第5章の適応進化の分子機構では「生物はどうやってうまく環境に適応進化するのか？」という素朴な疑問を扱っている。適応、適応度の解説から始まり、実際に適応形質の遺伝基盤を探る手法としてQTLマッピングやGWAS(ゲノムワイド関連解析)が紹介されている。第5章では野生生物の進化の遺伝基盤の3つの階層(量的遺伝パラメーター、遺伝アーキテクチャー、分子機構)についてトゲウオ科のイトヨ(本書の表紙にも登場している)などの野生生物を例に解説している。第6章の種分化の定義および内因性雑種異常の遺伝基盤、第7章の生態的種分化と種分化ゲノムでは「どのようにして新しい種が生まれるのか？」という疑問を扱っている。種の定義を考える上で外せないカール・フォン・リンネを含む3人の研究者の紹介から始まり、種分化の遺伝基盤に迫るアプローチなどについて具体例をあげて解説している。最後の残り2章ではこれまで考慮していなかった雌雄の違いに着目している。第8章の性的二型の進化遺伝機構では、雌雄で適応度が違う事例や雌雄が異なる遺伝子型を持つ事例について考察している。第9章の性染色体進化の遺伝機構では性が決まる代表的な2つのメカニズムについて概説されている。また各章の間に挟まれているBOXやカラムには各章に関係する事項がコンパクトに紹介されており、入門といいつつ遺伝学用語の嵐に疲れてしまった場合はこちらをつまみ読みするのも気分転換になってよいかもしれない。カラム内にあった赤の女王仮説の解説についてはなぜそのような名前なのかと気になっていたので記載があつてありがたかった。

本書の魅力はそれぞれの事象についてかなり簡略化した図を付して丁寧に説明されている点、それぞれの章に関してさらに深く学びたい場合の参考文献について詳細に記載してある点などがあげられる。加えて、巻末の索引は遺伝に関連する論文を読み解く際にとても有用と思われる(英字の索引もある)、手元に1冊あると気になる論文を理解するのにとても役立つと思われる。生態学の方針に足を踏み入れたものの、遺伝に関連する論文も読むようになった学生の皆様にもぜひおすすめしたい。

(土木研究所流域水環境グループ 梶ちがや)

一般社団法人日本生態学会
役員・代議員・委員一覧

代表理事（会長） 北島 薫 2024.3 ~ 2026.3

業務執行理事

（副会長・次期会長候補）

日浦 勉 2024.3 ~ 2026.3

（専務理事） 立田 晴記 2023.3 ~ 2025.3

（庶務担当） 赤坂 宗光 2023.3 ~ 2025.3

（会計担当） 辻 かおる 2023.3 ~ 2025.3

（出版担当） 久米 篤 2024.3 ~ 2026.3

（男女共同参画） 木村 恵 2024.3 ~ 2026.3

（情報/INTECOL） 村岡 裕由 2024.3 ~ 2026.3

理事（2024.3 ~ 2026.3）

相場 慎一郎 石濱 史子

森 章 小林 真

東樹 宏和 竹垣 毅

工藤 岳 土居 秀幸

西廣 淳 中野 伸一

吉田 丈人

監事

大塚 俊之 2023.3 ~ 2025.3

黒川 紘子 2024.3 ~ 2026.3

代議員（2023.12 ~ 2025.12）

全国代議員 相場 慎一郎 赤坂 宗光

石川 麻乃 石濱 史子

内海 俊介 大澤 剛士

小野田 雄介 角谷 拓

工藤 岳 佐竹 暁子

佐藤 拓也 土居 秀幸

東樹 宏和 西廣 淳

森 章

地区代議員 小林 真（北海道）

占部 城太郎（東北）

飯島 勇人（関東） 安藤 正規（中部）

丑丸 敦史（近畿）

鈴木 紀之（中国・四国）

竹垣 毅（九州）

Ecological Research 編集委員会

Editor-in-Chief 富松 裕

Deputy Editor-in-Chief 兵藤 不二夫

Associate Editors

in-Chief Ming Dong 江成 広斗

藤井 佐織 深澤 圭太

今井 伸夫 稲垣 善之

川津 一隆 Bo Li

牧野 渡 中路 達郎

及川 真平 大澤 剛士

阪口 翔太 横川 太一

横溝 裕行

Handling Editors

馬場 友希

Jae Chun Choe

Stuart J. Davies

Jingyun Fang

Jan Frouz

福井 大

Raghavendra Gadagkar

Rebecca Gladstone-Gallagher

半場 祐子

平田 竜一

Brenden Holland

市栄 智明

飯田 碧

石川 尚人

加藤 知道

北村 俊平

工藤 洋

松尾 奈緒子

村上 正志

仲澤 剛史

西村 欣也

Ariel Novoplansky

岡部 貴美子

Pil Sun Park

Serena Rasconi

Samuel R. P. -J. Ross

坂田 ゆず

佐藤 一憲

Stephen D. Sebestyen

Janne Sundell

高田 宜武

高巢 裕之

Arndt Telschow

内井 喜美子

Jihua Wu

安田 仁奈

Min Cao

Franck Courchamp

Guillaume Echevarria

Yunting Fang

藤木 大介

福島 慶太郎

日浦 勉

Sun-Kee Hong

井田 崇

David W. Inouye

上條 隆志

Eun-Shik Kim

小林 和也

松井 一彰

松崎 慎一郎

中村 誠宏

Tsewang Namgail

仁科 一哉

大橋 瑞江

大園 享司

Nishanta Rajakaruna

Sergio R. Roiloa

斎藤 琢

佐々木 雄大

佐藤 拓哉

Bo Song

高田 まゆら

高木 俊

Cindy Q. Tang

角田 裕志

Edward Vargo

Ping Xie

日本生態学会誌編集委員会（2023.1 ~ 2025.12）

編集委員長 永光 輝義

編集幹事 安房田 智司

小林 剛

伊東 明

高田 宜武

村上 貴弘

大澤 剛士

草刈 秀紀

白川 勝信

佐久間 大輔

松林 圭

富田 涼都

竹内 やよい

鈴木 重雄

相場 慎一郎

三宅 崇

箱山 洋

笠原 玉青

山浦 悠一

嶺田 拓也

東樹 宏和

保原 達

立木 佑弥

坂田 ゆず

都野 展子

島野 光司

保全生態学研究編集委員会 (2024.1 ~ 2026.12)

編集委員長 丑丸 敦史
 編集幹事 大澤 剛士
 編集委員 天野 達也 赤坂 宗光
 石濱 史子 市野川 桃子
 岩井 紀子 大澤 隆文
 片山 直樹 角谷 拓
 河口 洋一 岸本 康誉
 北村 亘 楠本 良延
 久保 雄広 小池 伸介
 小池 文人 五箇 公一
 小山 明日香 今藤 夏子
 佐伯 いく代 佐々木 雄大
 曾我 昌史 高田 まゆら
 立原 一憲 露崎 史朗
 東城 幸治 戸田 光彦
 中濱 直之 根岸 淳二郎
 松崎 慎一郎 宮下 彩菜
 森田 健太郎 山浦 悠一
 横溝 裕行

自然保護専門委員会 (2024.4 ~ 2026.3)

委員長 関島 恒夫：気候変動対策と環境影響
 評価
 副委員長 和田 直也：中部
 幹事 大久保奈弥：海洋
 地区選出委員
 露崎 史朗：北海道
 早矢仕有子：北海道
 高橋 雅雄：東北
 黒沢 高秀：東北
 亘 悠哉：関東
 奥山 雄大：関東
 増田 理子：中部
 中井 克樹：近畿
 古賀 庸憲：近畿
 岡 浩平：中国・四国
 比嘉 基紀：中四・四国
 久保田康裕：九州
 高嶋 敦史：九州
 平田 令子：九州
 増沢 武弘：高山・亜高山
 竹門 康弘：陸水
 伊谷 行：海洋
 久保田康裕：熱帯・亜熱帯
 横畑 泰志：寄生生物
 阿部 晴恵：遺伝子
 常田 邦彦：鳥獣管理
 矢原 徹一：海外渉外
 安溪 遊地：エネルギー問題
 角野 康郎：湿地
 水谷 瑞希：MAB
 五箇 公一：環境行政 (外来種)
 村上 興正：環境政策 (外来種)

若松 伸彦：環境政策 (自然公園)
 神山 智美：環境法
 Peterson Miles Isao：環境法

将来計画専門委員会 (2024.4 ~ 2026.3)

委員長 塩尻 かおり
 副委員長 小泉 逸郎
 委員 辻 和希 巖佐 庸
 石井 励一郎 佐竹 暁子
 三木 健 北島 薫
 彦坂 幸毅 黒川 紘子
 土居 秀幸 山道 真人
 佐藤 拓哉 石川 麻乃
 大竹 裕里恵 藤岡 春菜
 矢原 徹一 鏡味 麻衣子
 宇野 裕美 Jasmie Kass
 京極 大助

生態学教育専門委員会 (2024.4 ~ 2026.3)

委員長 丑丸 敦史
 副委員長 平山 大輔
 非教育学部系
 嶋田 正和 畑田 彩
 中田 兼介 宮田 理恵
 西脇 亜也
 教育学部系
 (平山 大輔) (丑丸 敦史)
 三宅 崇 中井 咲織
 佐賀 達矢
 高校教員系 矢追 雄一 藤井 新次郎
 博物館系 澤邊 (中村) 久美子 小林 誠

大規模長期生態学専門委員会 (2024.4 ~ 2026.3)

委員長 中村 誠宏
 委員 石原 正恵 伊東 明
 内海 俊介 黒川 紘子
 木庭 啓介 村岡 裕由
 中野 伸一 大手 信人

生態系管理専門委員会 (2024.4 ~ 2026.3)

委員長 西田 貴明
 副委員長 西廣 淳 伊藤 浩二
 幹事 高川 伸一 上野 裕介
 委員 赤石 大輔 大野 ゆかり
 大澤 隆文 小笠原 奨悟
 大脇 淳 佐々木 章晴
 鎌田 磨人 高村 典子
 白川 勝信 松田 裕之
 古田 尚也 矢原 徹一
 山下 慎吾 笠田 実
 吉田 丈人 多賀 洋輝
 河内 香織
 長谷 和子

野外安全管理専門委員会
 委員長 石原 道博 2024.4 ~ 2026.3
 委員 鈴木 準一郎 2024.4 ~ 2026.3
 粕谷 英一 2024.4 ~ 2026.3
 北村 俊平 2024.4 ~ 2026.3
 飯島 明子 2023.4 ~ 2025.3
 奥田 昇 2023.4 ~ 2025.3
 中島 啓裕 2023.4 ~ 2025.3

キャリア支援専門委員会 (2024.4 ~ 2026.3)

委員長 上野 裕介
 副委員長 高野 (竹中) 宏平
 委員 河内 香織 鈴木 智之
 曾我 昌史 西田 貴明
 宮脇 成生 小泉 逸郎
 荒木希和子 諸澤 崇裕
 成田 あゆ 満行 知花
 村中 智明 本郷 峻
 池本 美都 谷口 裕美

Firouzeh Javadi

(オブザーバー)

可知 直毅 黒瀬 奈緒子
 塩尻 かおり 富田 基史
 半場 祐子 三宅 恵子
 別宮 (坂田) 有紀子 寺田 佐恵子
 幸福 智 東樹 宏和
 木村 恵 鈴木 牧

情報交流支援専門委員会 (2023.4 ~ 2025.3)

委員長 村岡 裕由
 大澤 剛士 長谷川 功
 森田 健太郎 津田 吉晃
 深谷 肇一

大会企画委員会

委員長 高橋 一男
 副委員長 門脇 浩明
 運営部会 橋本 洸哉 伊藤 公一
 境 優 松岡 俊将
 小林 卓也 小黒 芳生
 立木 佑弥 田邊 晶史
 シンポジウム部会
 佐藤 永 徳田 誠
 榎木 玲美 大久保 祐作
 亀山 慶晃 武田 和也
 今田 弓女 田村 大也
 平田 晶子 栗原 洋介
 野田 響 渡部俊太郎

ポスター部会

西嶋 翔太 松村 健太郎
 高木 俊人 田路 翼
 長谷川 成明 小出 大
 友常 満利 樋口 裕美子

柴田 あかり 松葉 史紗子
 永濱 藍
 高校生ポスター部会
 山崎 曜 辻 冴月
 小峰 浩隆 中林 雅
 松本 哲也 佐賀 達矢
 宮田 理恵 藤岡 春奈
 宮崎 祐子 勝原 光希

発表編成部会

福井 翔 松崎 慎一郎
 吉岡 明良 片山 直樹

英語口頭発表部会

小林 真 塩尻 かおり
 畑 啓生 Jamie M. Kass
 鄭 峻介 安立 美奈子

(オブザーバー)

上村 真由子 福森 香代子
 水元 惟暁

オンライン部会

深谷 肇一 山北 剛久

日本生態学会賞・宮地賞・大島賞・奨励賞候補者選考委員会

鈴木 俊貴 鈴木 牧
 辻 かおる 門脇 浩明
 瀧本 岳 深野 祐也

自然史研究振興賞候補者選考委員会

工藤 岳 三橋 弘宗

生態学琵琶湖賞運営委員会

委員長 中野 伸一
 委員 占部 城太郎 中村 太士
 大手 信人 中井 克樹
 徳地 直子
 江島 宏治 (滋賀県副知事)
 北島 薫 (生態学会会長)
 日浦 勉 (生態学会副会長)
 立田 晴記 (生態学会専務理事)

ESJ72 運営検討タスクフォース (2023.9 ~ 2025.3)

委員長 立田 晴記
 委員 宮下 直 北島 薫
 赤坂 宗光 辻 かおる
 高橋 一男 小泉 逸郎
 吉田 丈人 大澤 剛士
 鏡味麻衣子



京都大学
生態学研究センター

Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3
Tel: (077) 549-8200 (代表), Fax: (077) 549-8201
センター長 中野 伸一

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page: <https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

2024年度 センター活動予定

生態学研究センターにおける2024年度の活動予定は以下の通りです。

センターニュース、セミナーなど、センターの最新情報は、ホームページ (<https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>) で公開しています。

なお、新型コロナウイルスの影響により本稿に掲載されている予定については変更の可能性があります。ご了承ください。

1. プロジェクト

創発的研究支援事業 (JST) (1件)、大学発新産業創出基金事業 (JST) (1件)、科学研究費助成事業による研究 (49件)、民間財団寄附金による研究 (4件) などが進められている。

2. 協力研究員

引き続き、協力研究員 (Affiliated Scientist) を公募する。

3. 共同利用・共同研究事業 (次頁の表を参照)

2024年度の共同利用・共同研究事業 (予算措置のあるもの) として、分野間の交流や若手研究者育成の観点などから、8件の共同研究 a、4件のワークショップ、1件の研究集会を採択した。ワークショップの開催日程などの詳細は、当センターのホームページに掲載する。

また、共同研究 b・資料利用は随時募集を行う。

4. 生態研セミナー

生態学研究センターの公式のイベントである「生態研セミナー」を毎月第三金曜日に開催している。本セミナーは、講演者と世話役の教員との協議によって、(1) 生態学研究センターにおけるセンター外の方々も参加可能な対面形式か、(2) 主に Zoom を用いたオンライン形式のいずれかの形で開催する。どちらの場合も、講師の同意が得られる場合には、主に Zoom を用いた外部へのオンライン配信も併せて行う。オンライン配信実施の可否はそれぞれのセミナーで異なるので、詳細についてはセンターホームページでご確認ください (なおオンラインでの視聴には事前申込が必要です)。また、生態学研究センターにて開催の対面形式のセミナーへの参加を希望される場合、会場への道順はセンターのホームページで確認いただけます。

5. ニュースレターの発行

センターニュースは、年2回 (7月、1月) 発行する予定である。原則として冊子体の発行はせず、センターのホームページにて内容を公開し、希望者には発行のお知らせをメール配信する (次頁にメール配信登録の URL 掲載)。ただし、公的機関等へは冊子体版をお届けする。センターの活動紹介の他、研究の自由な討議の場を提供していきたい。

6. オープンキャンパス、公開授業

3月25日に、大学院入試案内のためのオープンキャンパスを開催した。

京都大学では、遠隔地教育研究施設による公開講座等を集中して実施する京大ウィークスを毎年行っている。センターはその一環として秋頃に、一般公開「学校で習わない生き物の不思議」の開催を予定している。日程などはセンターホームページに掲載し周知する。

7. 共同利用施設

大型分析機器: DNA 関係では DNA 多型解析、遺伝子転写定量解析用機器など、安定同位体関係では、炭素・窒素同位体比オンライン自動分析装置 (元素分析計)、酸素・水素同位体比オンライン自動分析装置 (熱分解型元素分析計)、GC/C (ガスクロ燃焼装置付き前処理装置)、高速液体クロマトグラフ付き前処理装置を装備した安定同位体比質量分析計 delta V plus と、PreCon-GasBench II (自動濃縮装置付き気体導入インターフェイス)、元素分析計、GC/C を装備した安定同位体比質量分析計 delta V advantage の計2台が稼働している。

琵琶湖観測船: 高速観測調査船「はす」が稼働しており、観測調査、実習に利用される。これらの船舶は、旧センター所在地 (下阪本) に係留されている。

実験圃場林園: センター敷地内には、実験圃場、樹種植栽林園、林木群集実験植物園、CER の森、実験池があり、種々の野外実験に利用されている。

上記施設・設備の利用希望者は、事前に以下の担当者
者に連絡してください。

DNA シーケンサー等関係：工藤・本庄
安定同位体関係：木庭
観測船関係：合田・赤塚
実験圃場林園関係：工藤・松本・吉浪

8. 運営委員会、共同利用運営委員会

昨年度と同様、それぞれ数回開催される予定である。

● 2024 年度 共同研究 a・ワークショップ・研究集会 採択申請一覧 ●

申請者	所 属	申込内容	研 究 課 題
中臺 亮介	横浜国立大学・大学院環境情報研究院	共同研究 a	高解像度環境 DNA 分析による琵琶湖産魚類の種内・種間多様性の駆動プロセスの解明
荒木 希和子	滋賀県立大学・環境科学研究院	共同研究 a	植物地下部の環境応答性に関する研究
勝原 光希	岡山大学・学術研究院・環境生命自然科学学域	共同研究 a	送粉者を介した繁殖干渉下での共存機構：野外生物群集を模した競争実験
谷川 東子	名古屋大学大学院・生命農学研究科	共同研究 a	リター分解プロセスにおける窒素無機化・硝化・脱窒スキームの実証
清水（稲継）理恵	Department of Evolutionary Biology and Environmental Studies, University of Zurich	共同研究 a	倍数化によるエピゲノム進化と環境適応
三田村 啓理	京都大学・フィールド科学教育研究センター	共同研究 a	砂浜の食物網における餌資源としてのアオウミガメ卵の寄与率の解明
柴田 あかり	福井市自然史博物館	共同研究 a	植物の性転換におけるエピジェネティック制御の役割
米谷 衣代	近畿大学・農学部	共同研究 a	変動する植物の匂いシグナルが誘導する他個体の遺伝子発現を時系列で解析する
佐藤 拓哉	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	若手研究者のための河川観測プログラム
木庭 啓介	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	脱窒菌同位体比測定法ワークショップ 2024
木庭 啓介	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	安定同位体生態学ワークショップ 2024
木庭 啓介	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	安定同位体生態学測定支援ワークショップ 2024
福島 慶太郎	福島大学・農学群食農学類	研究集会	活火山を有する福島県の自然環境の生物地球化学的特徴に関する現地研究集会

2023 年度 センター受賞者

受賞者名	受賞名	受賞研究課題・受賞講演名・受賞論文等
工藤 洋	第 22 回日本生態学会賞	「植物の環境応答を解明する先駆的分子生物学的アプローチの構築」
高林 純示	日本農学賞 / 読売農学賞	植物揮発性物質が媒介する生物間コミュニケーションに関する基礎・応用研究
山尾 僚	第 32 回松下幸之助花の万博記念賞<松下幸之助記念奨励賞>	植物の "しなやかさ" に魅せられて
佐々木 陽依 山尾 僚	第 71 回日本生態学会全国大会ポスター賞 / 植物生理生態 / 最優秀賞	ループかツリーか：葉の通水性が介する生育環境に応じた葉脈タイプの進化
林 息吹 東樹 宏和	第 71 回日本生態学会全国大会ポスター賞 / 進化・数理 / 最優秀賞	多反復細菌群集の統計解析から確率論・決定論過程を定量的に理解する
井上 輝紀 山尾 僚	第 71 回日本生態学会全国大会ポスター賞 / 植物個体群・群落 / 優秀賞	散布者が形成する糞内種子群集：哺乳類の採餌様式が実生の競争環境を決める？
朝倉 日向子 佐藤 拓哉	第 71 回日本生態学会全国大会ポスター賞 / 生物多様性 / 優秀賞	寄生関係の多様性が生態系間エネルギー流の季節動態にもたらす影響

センターニュース メール配信登録のお願い

センターニュース発行のメール配信登録、配信先の変更、配信停止等をご希望の場合は、インターネット上の以下のフォームより必要事項のご入力をお願いいたします。

<https://ws.formzu.net/fgen/S75832635/>

センターニュースはバックナンバーを含め、センターホームページの以下の URL からご覧いただけます。

<https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/newsletter.html#ct3>



◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。

新年度の会費は9～12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。

退会する際は前年12月末までに退会届を会員業務窓口まで提出してください。

会費を1年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

会員種別	基本会費*	大会発表	選挙・被選挙権 (役員・代議員)
正会員(一般)	9500円	○	○
正会員(学生)	4500円	○	○
賛助会員	年会費 20000円	×	×

*生態学会では収入の少ない一般会員のために、学会費・大会参加費を学生会員と同額にする措置を実施しています。
詳細はウェブサイトをご覧ください。

【論文投稿の権利】

- ・日本生態学会誌 正会員のみ有
- ・保全生態学研究 投稿権利は会員に限定されません
- ・Ecological Research 投稿権利は会員に限定されません

【冊子配布を希望する会誌の追加費用】

- ・日本生態学会誌 2,000円
- ・保全生態学研究 2,000円

【非会員に向けた学会誌(冊子体)定期購読料】

- ・日本生態学会誌 5,000円
- ・保全生態学研究 5,000円

問い合わせ先：一般社団法人日本生態学会 会員業務窓口
〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター
E-mail: esj-post@as.bunken.co.jp
Tel: 03-6824-9381 Fax: 03-5227-8631